

41781

教科書文庫

4
810
41-1923
200030 2015

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

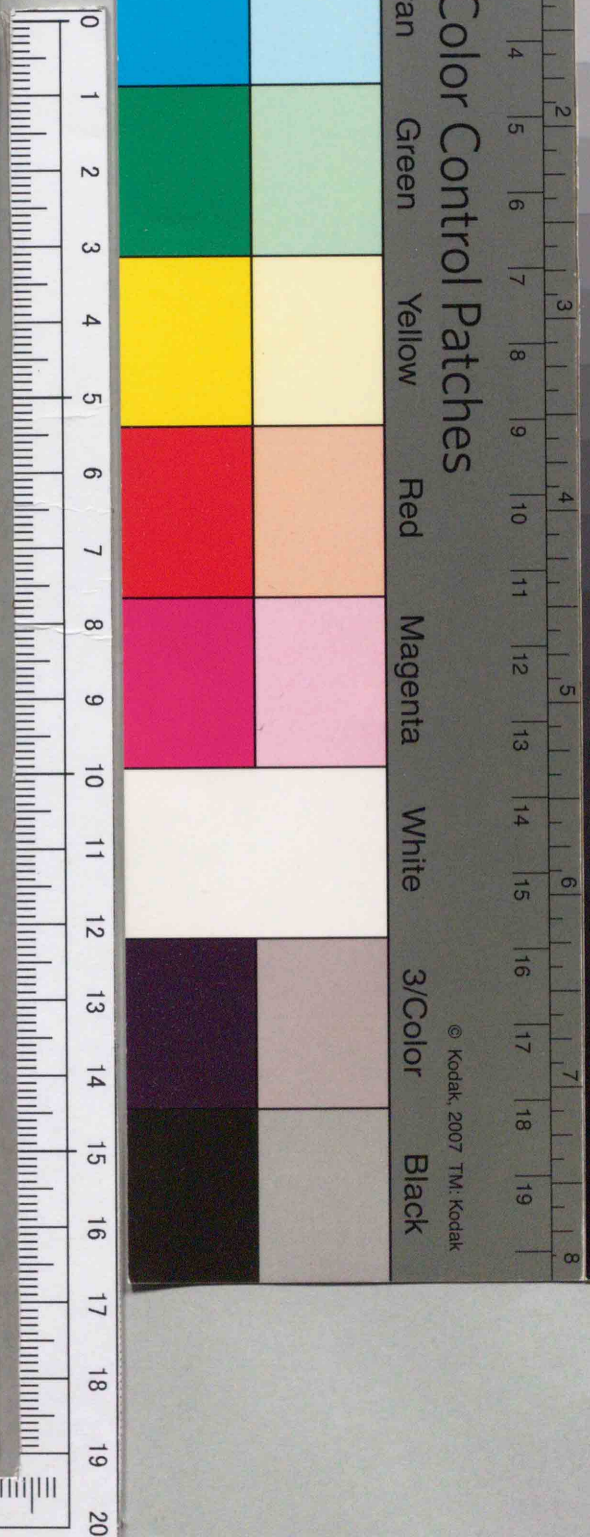


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫  
4  
810  
41-1923  
2000302015

第五十五版

吉田彌平 編

中國教科書卷七

東京 版藏館風光





文部省檢定  
大正二十一年十一月十六日  
中國國語教科書

教科書文庫

4

810

41-1923

2000302015

資料室

375.9  
Y019

吉田彌平編

中國文教科書

東京 光風館藏版

広島大学図書

2000302015





廣島大學圖書印



中國文教科書卷七

目次

一	比叡山	夏目漱石	一頁
二	法隆寺	高濱虛子	六
三	平泉	松尾芭蕉	一〇
四	俳人芭蕉	藤岡作太郎	一四
五	藤の花		一九
六	熊野落		二二
七	長谷部信連		二九

目

次

一

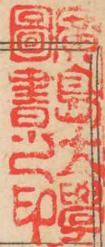


八	ウエストミンスターとパンテオン	河上肇	四〇
九	カーライルの舊栖	夏目漱石	五〇
一〇	大正の震災	坪内逍遙	五五
一一	皇太后宮を悼み奉る	星野恆	五九
一二	寺門政次郎に答ふ	藤田東湖	六六
一三	借家大将	井原西鶴	七六
一四	千里が竹	近松門左衛門	八三
一五	菅の荒野		九五
一六	江戸時代の文學		九七
一七	旅行	山路愛山	一〇五

一八	富士山	土井晩翠	一一三
一九	賀茂眞淵	伴蒿蹊	一二五
二〇	述・懷	本居宣長	一三三
二一	明治天皇大葬儀詠詞	四圍寺公望	一三四
二二	偉人	嘉納治五郎	一三七
二三	源博雅	源隆國	一四三
二四	世の中		一五七
二五	月雪花	芳賀矢一	一四九



目次終



中國文教科書卷七

一 比叡山

夏目漱石

夏目漱石  
名へ金之助  
英文學者  
小説家  
大正五年破  
年五十

春はものゝ旬になりやすき京の町を、七條から一條まで横に貫いて、煙る柳の間から温き水打つ白き布を高野川の磧に敷へつくして、長々と北にうねる路を大方は二里餘りも來ると、山はおのづから左右に通つて、脚下に奔る潺湲の響も、折れる程に、曲る程に、あるはこなた、あるはかなたと鳴る。山に入りて春は更けたるを、山を極めたらば春はまだ残る。



雪に寒からうと見あげる峰の裾を縫つて暗き陰に走る一條の路に、爪先上りなる向ふから大原女が来る、牛が来る。京の春はどこまでも長く且靜かである。

。溪川に危く渡せる一本橋を前後して横ぎつた二人の影は、草山の草繁き中を辛うじて一縷の細き力に頂へ抜ける小徑の中に隠れた。草は固より去年の霜を持越したまゝ、立枯の姿であるが、薄く溶けた雲をとほして眞上から射し込む日影に蒸返されて兩頬のほてるばかりに暖い。

百折れ千折れ、五間とは眞直に續かぬ坂道を暢氣な顔の女が「御免やす」と下りて来る。身の丈に餘る粗朶の大束を縁も濃き髪の上に壓へつけて手もかけずに戴きながら、友の

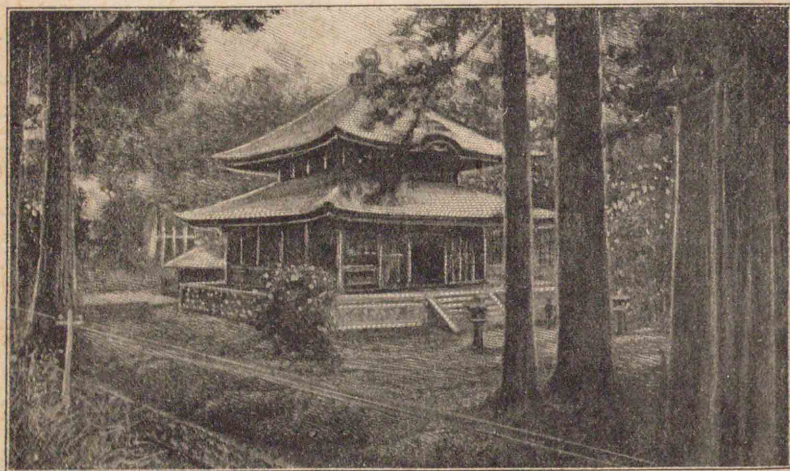
横をすり抜ける。生ひ茂る立枯の萱をごそつかせた後姿の眼につくは、めくら縞の黒きが中をはすに抜けた赤襪である。一里を隔てゝも、そこと指す指の先に引つ着いて見える程の藁葺は、この女の家でもあらう。天武天皇の落ち給へる昔のまゝに靡く霞は長へに八瀬の山里を封じて長閑である。

草山に登りつめて雑木の間を四五間上ると、急に肩から暗くなつて踏む靴の底がしめつぽく思はれる。路は山の脊を西から東へ渡して、忽ちのうちに草を失するとすぐ森に移つたのである。近江の空を深く色どるこの森の動かねば、その上の幹とその上の枝が幾重幾里に連なつて昔なが



三藐三菩提  
阿耨多羅三藐三  
菩提の佛達我が  
立つ袖に冥加あ  
らせ給へ  
(傳教大師)

らの翠を年毎に黒く疊むと見える。二百の谷を埋め、三百の神輿を埋め、三千の悪僧を埋めて、猶餘りある葉裏に三藐三菩提の佛たちを埋め盡して、森々と半空に聳ゆるは傳教大師以來の杉である。余は只一人この杉の下を通る。右よりして左よりして、行く人を兩手に遮る杉の根は、土を穿ち石を裂いて深く地盤に食ひ入るのみか、餘る力に跳ね返して暗き道を二寸の高さに段々と横切つて居る。登らんとする岩の梯子に自然の枕木を敷いて踏心地よき幾級の階を山靈の賜と息を切らして上つて行く。行く路の杉に逼つて暗きより洩るゝが如く這ひ出づる日蔭蔓の足にまつはる程に繁きを越せば、引かれたる蔓の長



比叡山

きを傳はつて、手も届かぬに朽ちかゝる齒朶の、風なき晝をぶらくとうごく。

「おい、あれを見給へ。」と待つて居た友は櫻の杖で杉の間を指す。天を封ざる老幹の亭亭と行儀よく並ぶ隙間に、的礫と近江の湖が光つた。「なるほど」と眸を凝す。鏡を延べたとばかりでは飽き足らぬ。琵琶の銘ある鏡の明か



なるを忌んで、叡山の天狗どもが宵に偷んだ神酒の酔に乗じて曇れる氣息を一面に吹掛けたやうに、光るものゝ底に沈んだ上には、野と山にはびこる陽炎を巨人の繪具皿に集めて只一刷毛になすりつけた激澗たる春色が十里の外に模糊とたなびいて居る。 (漱石全集)

### 二 法隆寺

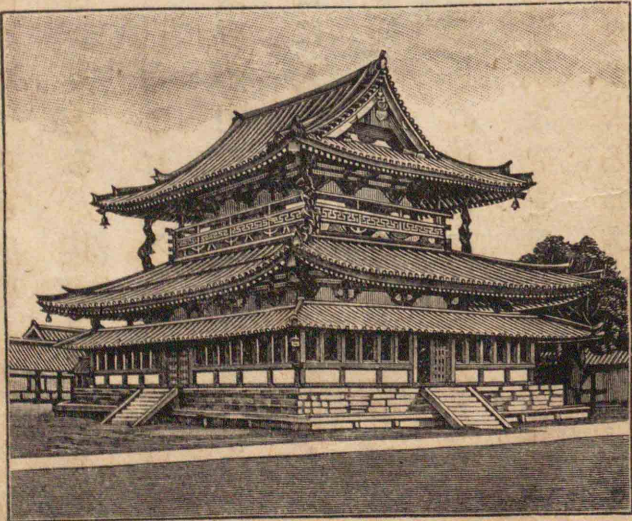
高濱 虚子

法隆寺の金堂に這入つた。明るい處から急に暗い處に這入つたので、初の間は何も見えぬ。漸くにして印度佛の後ろが見えて来る。眞四角な天蓋が見えて来る。だんく〜と様々な佛體が見えて来る。案内者は壁の方を向いて、此

高濱虚子  
名ハ清  
併人  
小説家  
明治七年生

壁畫  
筆者ハ未詳鞍作  
部鳥トモイヒ又  
ハ高麗ノ僧曇徴  
トモイフ

の壁畫は朝鮮の僧何某が聖德太子の命を受けて書いたものだといふ。唯眞黒な壁と思つてゐたが、成程壁畫がある筈だと眸を据ゑて暗中を見ると、暫くして纔にそれらしいものが目に入る。よく見て居ると、頭らしいもの、顔らしいもの、手らしいものなどがだんだん見えて来る。人間よりも稍大きい位に畫かれて居る佛様が澤山あるのであ



法隆寺金堂



つた。案内者は此の彩色のうちに、丹いのは珊瑚末だといふ。彩色があるのかと更に凝視すると、成程彩色がある。纔に碧い色が見える、丹い色が見える。其處ばかりをじつと見て居ると、乏しい光線も自らこれのみに集つて來るのかと思ふやうに、だんく其處が明るくなつて來て、その丹碧の色は浮き出るやうに目に入る。固より千年以上の歲月を経た畫だ。剝げて居る、燻つて居る、輪廓さへ明かでない。それに拘らず、その丹碧の色は鮮かに目に入る。千年の古色を呈して尙その中に鮮明な光を湛へて居る。余は生を此の世に享けて以來、未だかゝる重みのある、そして鮮明な色を見たことが無い。その筈だ、珊瑚を粉にした珊瑚

末が壁土同様、惜し氣も無く磨り込んであるのだ。

余はそれから玉蟲の廚子も見た。印度佛も正面に廻つて



法隆寺金堂壁畫

見た。天蓋も凝視した。一と

して名高くないものは無い。

佛體も一々見た。何れにも恍

惚として目を瞞つたが、しかし

此の丹碧の色ほど強く心を刺

戟したものは無かつた。

それから金堂を出て夢殿の廊

下を通つて居る時、りんくくと物が鳴つた。案内者が

「あの鈴は金鈴といつて、黄金を澤山入れて拵へた鈴ださう



松尾芭蕉  
又ノ號、桃青  
江戸時代俳句ノ  
大家  
元祿七年(一三五四)  
歿  
年五十一

です。といつた。その音の好さと云つたら喩へようにも物が無い。此の法隆寺にあるどの佛體を叩いてもあんな好い音は出まい。極樂浄土で啼くといふ伽陵頻迦の聲も恐らくかうまではあるまいと思つた。それから廊下を傳つて寶藏の方へ行きかけると、又りんくと鳴つた。あゝたまらない好い音だと立止まつて耳を澄ました。此の時ふと、今案内者は鈴だと云つたが、もしか、彼の金堂の碧畫の色が音を出したのではあるまいか。と疑つた。

蘭の香も法隆寺には今めかし。(俳諧一口噺)

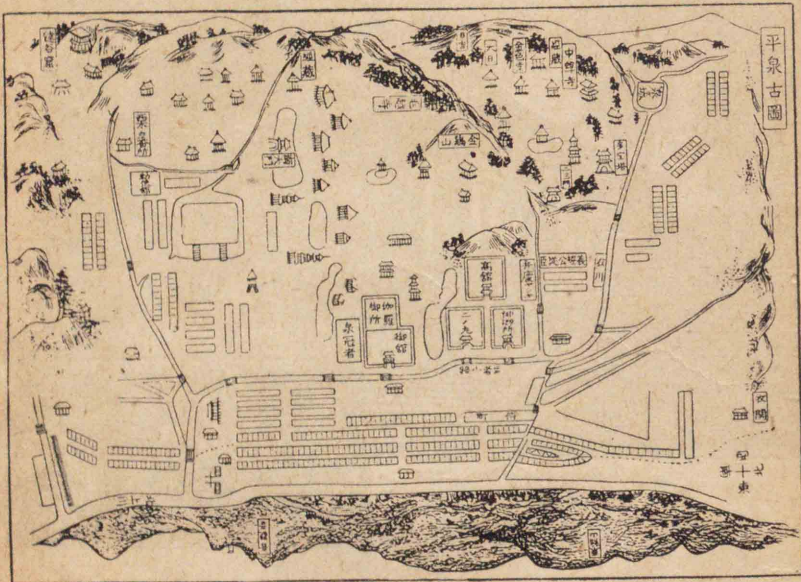
三平泉

松尾芭蕉

四月十八日土

十二日  
元祿二年五月

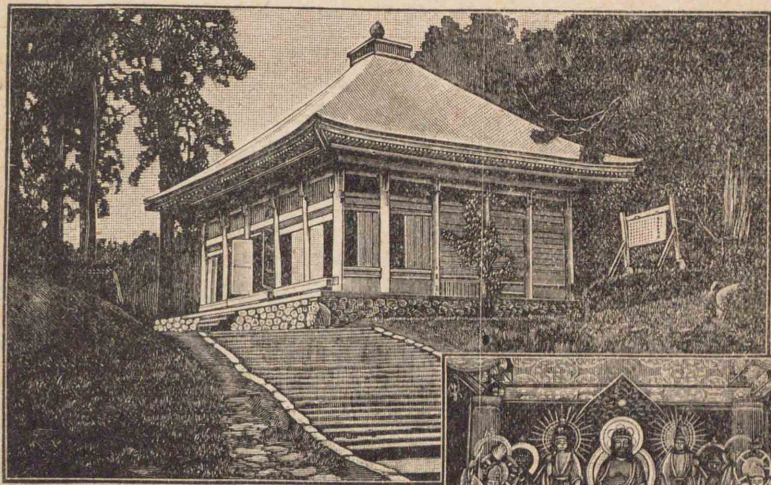
黄金花咲く  
すべろぎの御代  
榮えむとあづま  
なるみちのく山  
に黄金花咲く



平泉古圖

十二日、平泉と志し、あねはの松緒だえの橋など聞傳へて人跡稀に、雉兔芻蕘の往きかふ路、そこともわかず、終に路踏みたがへて石巻といふ港に出づ。「黄金花咲く」とよみて奉りたる金華山海土に見渡し、數百の廻船入江に集ひ、人家地を





三尊佛金色堂

争ひて、竈の煙立續きたり。  
「思ひがけずかゝる處にも  
來れるかな」と宿借らんと  
すれど、更に宿貸す人もな  
し。やうく貧しき小家  
に一夜を明して、明くれば  
又知らぬ道迷ひゆく。袖  
の渡尾駁の牧眞野の萱原  
などよそめに見て、遙なる  
堤を行く。心細き長沼に  
沿うて戸伊摩といふ處に

一宿して、平泉に到る。その間二十餘里ほどと覺ゆ。

三代の榮耀一炊の夢にして、大門の跡は一里こなたにあり。  
秀衡が墟は田野になりて、金雞山のみ形を遺す。まづ高館  
にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉  
が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊  
跡は衣が關を隔て、南部口を差固め、夷を防ぐと見えたり。  
さても、義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。  
「國破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打敷きて、時  
の移るまで涙を落しぬ。

夏草や、つゝものどもが夢の跡。

卯の花に兼房見ゆる白髪うな。

曾良

三代  
藤原清衡・基衡・  
秀衡  
金雞山  
秀衡が築イテ平  
泉ノ鎮護トシタ  
山

國破れて  
國破山河在  
城春草木深  
兼房  
義經ノ郎黨増尾  
七郎年六十餘白  
髮フフリ亂シ奮  
闘シテ討死シタ



かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を遣し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて、珠の扉風に破れ黄金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新に圍ひ、藁を覆うて風雨を凌ぎ、姑く千歳の記念となれり。

きみだまの降りのよしてや光堂。

(奥の細道)

#### 四 俳人芭蕉

藤岡作太郎

革新の旗を翻して天下の俳風を一變したりしは松尾桃青なり。桃青又芭蕉と號す。伊賀上野の人。初、その地の城代藤堂氏に仕へしが、後、主家と世事とを謝して専ら風流三

北村季吟

國學者

寶永二年(三三九)

歿

年八十二

白樂天

唐ノ詩人

(長一四三)

寒山子

唐ノ詩僧

李

李白

唐ノ詩人

(長一四三)

杜

杜甫

唐ノ詩人

(長一四三)

西行

歌僧

建久元年(八五〇)

歿

年七十三

昧に入る。その俳諧の經歷を尋ねれば、まづ京に出でて北村季吟の門に古風を學び、又流行を追うて檀林風を弄ぶ。芭蕉もとより學才あり。詩にありては白樂天の平易、寒山



松尾芭蕉像

子の禪機を喜び、別けて李杜の風格を慕ふ。桃青の稱も李白と相對せしめんが爲なりと傳ふ。わが國にて

は最も西行に私淑して、その山家集によりてこそ正風の眼は開けたれ。旅行の癖も亦この自然詩人に負ふところあり。後年江戸に定住して後も、屢、道祖神にそゝのかされて



天外放浪の客となる。

げにも<sup>。</sup> 押擲行脚は芭蕉が一生の行樂、諸國の名所舊跡にして渠の詩囊に入らざるもの幾何かある。かゝる經驗を以て從來踏襲の俳句に臨めば、造化の隱微を究め自然の祕鑰を開くべき詩の本義いづこにありとも知らず。この玩具の如き文學の形式によりて胸裡に鬱勃たる感情と目睫に映じ來る森羅萬象とを寫さんとすれば、茫然自失せざらんと欲するも得んや。李杜西行の詩歌は、さすがに宇宙の玄理を解して人生の奥底に觸れ、千載の後、讀者をして光風霽月の襟度を偲ばしむ。されど國異なれば言語同じからず、星移れば人情もまた變ず。渠等が詩形、美は美なりといへ

筌蹄  
筌者所<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>魚  
得<sup>レ</sup>魚而忘<sup>レ</sup>筌。  
蹄者所<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>兔  
得<sup>レ</sup>兔而忘<sup>レ</sup>蹄。

ども直にわが筆に入らず、即ち之を今に用ひんや。筌蹄は問はず、たゞ魚鳥を狙へ。月をだに忘れずば、指自ら指さん。これぞ芭蕉が根本の主張にして、用語は現代を標準とすれども、取材は必ずしも月・雪・花・紅葉とも限らず、見るものにつけ感興の浮ぶがまゝに打出し、先哲の跡を見ずしてその意を見る。さても

ぬる池や蛙もさるものさ

とせび

の一句に至りて、忽然として轉迷解悟の境に入れりといふ。この一句、詩としての價值はさばかりに高しともおもはれ



ず。たゞ芭蕉が經歷の上より見て、すなはち無量の妙味あり。今日まで彼が費せる千思萬考、皆たゞこの境に臨んで即ち應ずる一味の筈蹄を得んがために外ならざりけり。中心の感情は本技巧の波文は末たるべしといへる年來の所説は、こゝに至りて動かすべからざる自信となれるなりけり。

芭蕉の句は壯より老に及びて三たび變化す。漢語を用ふること多く、絢爛の趣ありしはその初なり、華實併せ得んことを欲して苦心慘澹たりしはその中なり、切磋琢磨の功を終へて成るところ却て平易に、言ふべからざる輕味を有するに至れるはその終なり。されど一たび古池の響に得た

る信仰は生涯を通じて變ぜず、よく俳諧をして盛唐の詩、西行の和歌と比較して軒輊するところなきに至らしむ。翁もまた偉なるかな。(國文學史講話)

### 五 藤の花

草臥れて宿かるころや、藤の花。 松尾芭蕉

五月雨をあつめて早し、最上川。

菊の香や、奈良には古き佛たち。

初時雨、猿も小蓑をほしげなり。

秋風や、白木の弓に弦はらん。 向井去來

夕立や、家をめぐりて家鴨鳴く。 寶井其角



黄菊白菊その外の名はなくもがな。	服部嵐雪
子や待たん、あまり雲雀の高揚り。	杉山松風
ながくと川一筋や、雪の原。	春花園凡兆
行きく〜て倒れふすとも萩の原。	河合曾良
ほとゝぎす平安城をすぢかひに。	與謝蕪村
落葉して遠くなりけり、白のおと。	
春の泊、鯛よぶこゑや濱のかた。	高井几董
山路來て向ふ城下や、凧のかず。	炭 太祇
卯の花の中ゆく蓑のしづくかな。	加藤曉臺
おにやらひ裏の町にて聞えけり。	春泥舍召波

### 六 熊野落

虎の尾を履む  
履ニ虎尾、不レ唾  
レ入亭。

大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞召されんために、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城已に落ちて、主上囚はれさせたまひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上に迫りて、天地廣しといへども御身を隠さるべき處なし、日月明かなりといへども長夜に迷へるこゝちして晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻にイみて、人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、いづくとても御心安かるべき處なかりければ、かくても暫しはと思召されける處に、一乘院の候人按察法眼好專、如何して聞きたりけん、五百餘騎を率ゐて未明に般若寺へぞ寄

一乘院  
奈良興福寺ノ寺  
務門跡



筆蹟

今度所願令成就者丹生明神之寶前以十二神侶可始長日不斷之護摩且如舊可專人法佛法之紹隆仍所立願狀如件元弘貳年十二月廿五日二品親王(花押)

皇太后御覽

丹生明神之寶前以十二

神侶之祐長日不斷之

護摩且如舊可專人

法佛法之紹隆仍

所立願狀如件

元弘貳年十二月廿五日

二品親王(花押)

(寶墨徵史) 蹟筆王親良護

せたりける。折節宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせたまふべき様もなかりける上、透間もなく兵已に寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。「さらばよし自害せん」と思召して、既に押肌脱がせたまひたりけるが、事叶はざらん期に臨んで腹を切らん事はいと易かるべし。若しやと隠

大般若  
大般若經六百卷  
唐ノ玄奘三藏ノ  
譯シタモノ

れて見ばや」と思召し返して、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり、二つの櫃は未だ蓋を明けず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して蓋をもせざりけり。此の蓋を明けたる櫃の中へ御身を縮めて臥させ給ひ、其の上に御經をひきかづきて、隱形見の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。「若し搜し出されなば、やがて突立てん」と思召して、氷の如くなる刃を抜いて御腹に差當て、兵「こゝにこそ」といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推し量るもなほ淺かるべし。さるほどに、兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも残る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、是體の物こそ怪



しけれ。あの大般若の櫃を明けて見よ。とて、蓋したる櫃二つを明けて御經を取出し、底を翻して見けれどもおはせず。蓋開けたる櫃は見るまでもなし。とて、兵皆寺中を出て去りぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行くこゝちして猶櫃の中におはしけるが、若しまた兵立歸り、委しく捜す事もやあらんずらんと御思案ありて、やがて前に兵の捜し見たりつる櫃に入り替らせ給ひてぞおはしける。

案の如く兵ども復佛殿に立歸り、前の蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なし。とて、御經を皆打移して見けるが、からからと打笑うて、大般若の櫃の中をよくく捜したれば、大塔宮は入らせ給はで、大唐の玄奘三藏こそ在しけれ。と戯れけ

れば、兵皆一同に笑ひて門へぞ出でにける。是、偏に摩利支



熊野附野  
護による命な  
り。と、信心肝に  
銘じ、感涙御袖  
を沾せり。

ば、即ち般若寺を御出あつて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひけ

かくては南都  
邊の御隠れが  
も叶ひ難けれ



る。御供の衆には、光林房玄尊、赤松律師則祐、木寺相模、岡本三河房、武藏房村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼是以上九人なり。宮を始め奉つて、御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半にせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。此の君固より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事をれば、御歩行の長途は定めて叶はせ給はじと、御供の人々豫ては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮脚半草鞋をめして、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣宿々の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行き

あひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むることなかりけり。

雨を含める  
孤村樹色  
夕陽  
雨、遠寺鐘聲  
夕陽

由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ舟の楫をたえ、浦の濱木綿幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、薄紫や藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月にみかける玉津島、光も今はさらでだに長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。

其の夜は叢祠の露に御袖を片敷いて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御



山路  
山路元無雨、空翠濕、入衣。

肱を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、鬢づら結うたる童子一人來て、熊野三山の間は、尙も人の心不和にして大義成り難し。是より十津川の方へ御渡り候ひて、時の至らんを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附け進らせられて候へば、御道指南仕るべく候。と申すと御覽ぜられて、御夢は即ち覺めにけり。是、權現の御告なりけりと憑しく思召されければ、未明に御悅の奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねてぞ分け入らせたまひける。其の道のほど三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峰の雲に枕を欹て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍んで朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより

宮  
高倉宮以仁王  
五月  
治承四年（一一八四）  
三位入道  
從三位入道源賴政

雨なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁劍に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を経させ給へば、御身も草臥れ果て、流る、汗水の如く、御足缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。御供の人々も、其の身鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れてはかゝしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に、十津川へぞ着かせ給ひける。〔太平記〕

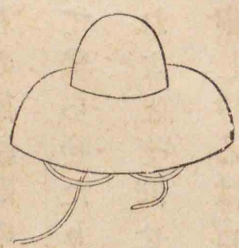
七 長谷部信連

さる程に、宮は五月十五夜の雲間の月をながめさせたまひて、何の行方も思召し寄らざりけるに、三位入道の使者とて



文持ちて忙しげに出で来る。宮の御乳母子六條佐太夫宗信これを取りて御前に参り、開いて見るに、君の御謀叛既に顯れさせたまひて、土佐の幡多へ移しまゐらすべしとて、官人どもが別當宣を承つて、御迎に参り候。急ぎ御所を出でさせたまひて三井寺へ入らせおはしませ。入道もやがて参り候はん」とぞ書かれたる。

宮は此の事如何せんと思召し煩はせたまふ處に、宮の侍に長兵衛尉長谷部信連といふものあり、折節、御前近う候ひけるが、進み出でて申しけるは、「たゞ何のやうも候まじ。女房の装束にいでたゞせたまひて、落ちさせたまふべうもや候らん」と申しければ、「此の儀尤も然るべし」とて御髪を亂り、重



市女笠

ねたる御衣に市女笠をぞ召されける。六條佐太夫宗信、傘持ちて御供仕る。鶴丸といふ童袋に物入れて戴きたり。たとへば、青侍が女を迎へて行くやうにいでたゞせ給ひて、高倉を北へ落ちさせ給ふに、大きな溝のありけるを、いと物軽く越えさせ給へば、道行く人が立止つて、ぼしたなの女房の溝の越えやうや」とて、怪しげに見まゐらせければ、いとゞ足早にぞ過ぎさせおはします。

御所の御留守には、長兵衛尉長谷部信連をぞ置かれける。女房達の少々おはしけるをば、彼處此處へ立忍ばせて、見苦しきものあらば取りしたゞめんとて見るほどに、さしも宮

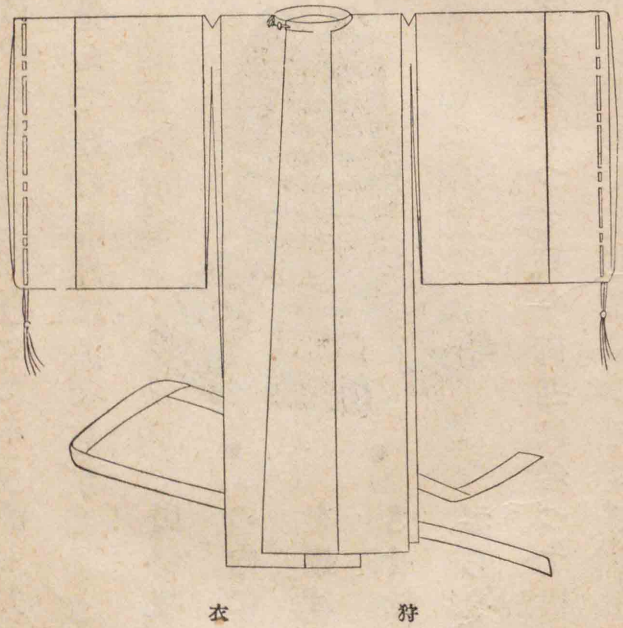


の御祕藏ありける小枝こえだと聞えし御笛を常の御所の御枕に  
 取忘れさせたまひたるをぞ、立歸りても取らまほしうや思  
 召されけん。信連これを見つけて、「あなあさまし。さしも  
 君の御祕藏の御笛を」と申して、今五町がうちにて追つとい  
 て參らせたり。宮斜ならず御感ありて、「我死なば御棺に入  
 れよ」とぞ仰せける。「やがて御供仕れ」とおほせければ、信連  
 申しけるは、「只今あの御所へ、官人どもが御迎に參り候なる  
 に、人一人も候はざらんはむげに口惜しく存じ候。其の上  
 あの御所に信連が候と申すことをば上下皆知つたる事で  
 こそ候へ。今夜候はざらんは、それも其の夜は逃げたりな  
 どいはれんこと口惜しう候べし。弓矢執る身は、かりにも

名こそ惜しう候へ。官人どもに暫くあひしらひ、一方打破

つてやがて參り候は  
 ん。とて只一人取つて  
 返す。

信連が其の夜の装束  
 には、薄青の狩衣の下  
 に萌黄匂の腹巻を着  
 て、衛府の太刀をぞ帶  
 いたりける。三條表  
 の總門をも、高倉表の  
 案の如く源太夫判官

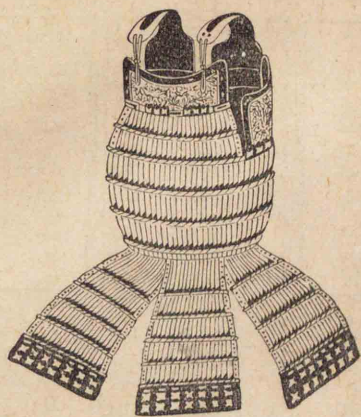


狩衣

小門をも、共に開いて待ちかけたり。



兼綱出羽判官光長都合其の勢三百餘騎十五日の子の刻に宮の御所へぞ押寄せたる。源太夫判官は存ずる旨ありと覺えて、遙の門外に控へたり。



腹巻

出羽判官光長は乗りながら門の内に打入れ、庭に控へ、大音聲を揚げて、宮の御謀叛既に顯れさせ給ひて、土佐の幡多へ遷し參らせんが爲に、官人どもが別當宣を承つて、只今御迎に參つて候。疾うく御出候へ」と申しければ、信連大床に立つて、當時は御所でも候はず、御物詣で、候ぞ。何事ぞ、事の子細を申されよ」といひければ、出

羽判官「なん、で、ふ、此の御所ならでは、何處へか渡らせ給ふべかんなるぞ。其の儀ならば、下部ども參つて搜し奉れ」とぞ申しける。信連重ねて「物も覺えぬ官人どもが申しやうかな。馬に乗りながら門の内へ參るだにも奇怪なるに、剩へ下部ども參つて搜し奉れとはいかでか申すぞ。長兵衛尉長谷部信連が候ぞ。近く寄つて過ちすな」とぞいひける。廳の下部のうち、金武といふ大力の剛の者、打物の鞆を外し、信連に目を懸けて、大床の上へ飛登る。これを見て同隸ども十四五人ぞ續いたる。信連之を見て狩衣の帶紐引切つて捨つるまゝに、衛府の太刀なれども、身をば心得て作らせたるを抜合せて散々にこそ振舞うたれ。敵は大太刀大

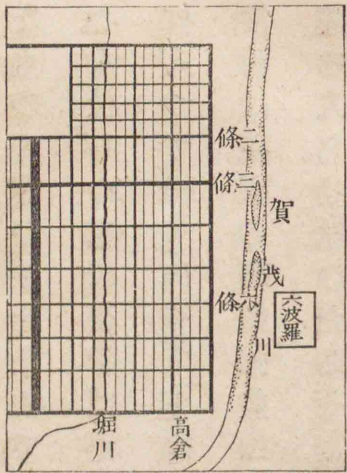


長刀で振舞へども、信連が衛府の太刀に斬立てられて、嵐に木の葉の散るやうに、庭へさつとぞ下りたりける。

五月十五夜の雲間の月のあらはれ出でて明かりけるに、敵は無案内なり、信連は案内者にてありければ、あそこの面廊に追っかけては、はたと斬り、此處のつまりに追つては、ちようと斬る。「如何に宣旨の御使をばかうはするぞ」といひければ、「宣旨とは何ぞ」とて、太刀ゆがめば躍りのき、押直し、踏直し、矢庭によき者ども十四五人ぞ斬伏せたる。

その後、太刀の鋒三寸ばかり打折つて捨て、けり。腹を切らんと腰を探せども、鞘巻落ちてなかりければ、力及ばず、大手をひろげて高倉表の小門より跳り出でんとする處に、大

長刀持ちたる男一人寄り合つたり。信連長刀に乗らんと飛んでかゝるが、乗り損じて股を縫ひざまに貫かれ、心は猛く思へども、大勢の中に取り籠められて、生捕にこそせられけ



京都市地圖

れ。其の後、御所中に亂れ入つて搜せども、宮は渡らせたまはず。信連ばかり翹めて六波羅へ率てまゐる。

前右大将宗盛卿、大床に立つて信連を大庭に引き寄せさせ、誠にわ男は、宣旨の御使と名のるを、「宣旨とは何ぞ」とて斬つたりけるか。其の上、廳の下部ども多く刃傷殺害したんなれば、能くく糺問して事の



子細を尋ね問ひ、其の後、河原に引出して首を刎ねよ」とぞのたまひける。信連もとより勝れたる大剛の者なりければ、居直りあざわらつて申しけるは、「この程あの御所を夜な夜なものゝ窺ひ候を、なんでふ事のあるべきと思ひ侮つて用心も仕らぬ處に、夜半ばかりに鎧うたる者どもが二三百騎打入つて候を、何者ぞ」と尋ねて候へば、「宣旨の御使」と申す。當時は諸國の竊盜強盜山賊海賊など申す奴ばらが、或は公達の入らせ給ひたるぞ。或は「宣旨の御使」など名のり申すとかねく承つて候ほどに、「宣旨とは何ぞ」とて斬つたる候。凡そ信連物の具をも思ふやうに仕り、鐵良き太刀をも持つて候はんには、只今の官人どもをばよも一人も安穩にては

還し候はじ。其の上、宮の御在所は何處に渡らせ給ひ候やらん、知り參らせぬ候。假令知り參らせて候とも、侍ほどの者の一度申さじと思ひ切りてんことを、糺問に及んで申すべき様なし」とて、其の後は物も申さず。

幾らも並みゐたりける平家の侍ども、あつばれ剛の者や。是等をこそ一人當千の兵ともいふべけれ」と口々に申しければ、その中に或人の申しけるは、「あれが高名は今に始めぬことぞかし。先年所にありし時、大番衆の者どもの止めかねたりし強盜六人に只一人追つかゝり、二條堀川なる處にて四人斬伏せ、二人生捕つて、其の時なされたりし左兵衛尉ぞかし。あつたら男の斬られんずることの無慚さよ」と惜

所  
院ノ武者所



能登國  
能登國大屋莊ヲ  
賜ハツタ

河上肇  
經濟學者  
法學博士  
京都帝國大學教  
授

みあへりければ、入道相國いかゞ思はれけん、さらば、な斬つそ。とて、伯耆の日野へぞ流されける。  
平家亡び源氏の世になつて東國へ下り、梶原平三景時についで事の根元一々に申したりければ、鎌倉殿神妙なりと感じたまひて、能登の國に御恩蒙りけりとぞ聞えし。

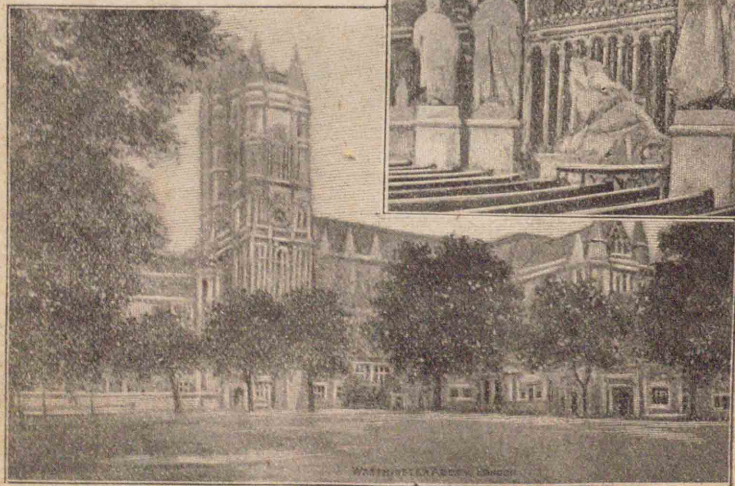
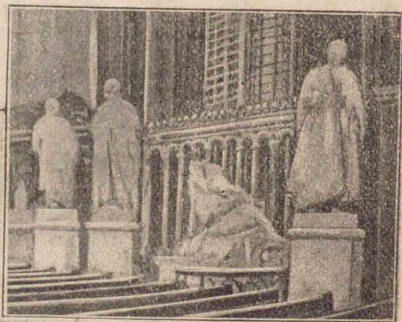
(平家物語)

### ハ ウェストミンスターとパンテオン

河 上 肇

倫敦のウェストミンスター寺院は偉人國葬院とも謂ふべき處である。巴里のパンテオンも略之に似たもの。

倫敦に最初行つた時は、僅か一週間滞在したゞけであるが、其の一週間の中に三度も行つた程、ウェストミンスター寺院は私の氣に入つた。始めてウェストミンスターに行つた時、人々何れも帽を手にせるを見て、西洋の禮儀をば少しも心得ぬ私でありながら、直に寺院では帽子を脱ぐものだ



ウエストミンスター寺院とその禮拜堂

ハ ウェストミンスターとパンテオン



など氣附いた。それほど全體の空氣が落ちついて居て、如何にも人の心を静める感じがした。さうして隅から隅まで案内者なしに、自分一人で思ふがまゝに逍遙することの出來たのは、如何にも悦ばしかつた。無料では入れぬ處でも、一定の金さへ拂へば、何時でも何時までも思ふがまゝに逍遙することが出來た。

經濟學者ではヘンリー・フォーセットの半身像が此處に在る筈であるのに、第一日目にはそれを見落してしまつた。二日目には是非探し出したいと思つたが、容易に見つからぬ。それもその筈、往來止にしてある片隅の室のはるか奥の方に半身像が懸けてあるのであつた。併し遠くから薄

フォーセット  
英國ノ經濟學者  
(1833-1884)

ダーウィン  
英國ノ生物學者  
(1809-1882)

暗い壁に懸けてある半身像を兎も角も認め得た位だから、悠々と此の寺院の内をさまよふことの出來ることも推して知るべきである。進化論で有名な彼のダーウィンの葬つてある其の床石の上でも、私は様々の事を思ひ浮べながら、飽くまで佇むことが出來た。ダーウィンの半身像の懸つて居るすぐ傍の壁には「エネルギー不滅の法則」を考へ出したジュールの爲の記念板がある。

此の牌はジュール、プレスコット、ジュールを永遠に記念せんがため結合したる諸國の人々によりて、茲にニュートン・ハーシェル及びダーウィン等の墳墓に近い處に置かる。

ジュール

英國ノ物理學者  
(1814-1889)

ハーティン

英國ノ數學者  
物理學者  
(1642-1727)

ハーシェル

英國ノ天文學者  
物理學者  
(1737-1811)



ワット  
英國ノ機械學者  
發明家  
(1726-1816)

と云ふ牌銘も、私は之を手帳に書きとめることが出来た。幾度か私の論文や著書に引合に出した蒸氣機關の發明者ジェームス、ワットの石像もある。ガウンを着て椅子に腰を掛け、左脚を後にひいて右脚を前に出し、紙を膝の上に展べ、左手に其の端を抑へ、右手にコムパスを握つて居る。臺石の表面を見ると、それには次の如き意味の文字が彫りつけてある。

斯の國の國王諸大臣並に貴族平民の多くのものどもが、此の記念像をジェームス、ワットのために建てた。これは彼の名を永遠に傳へようとしてゝはない。彼の名は平和の事業の榮ゆるかぎり、かゝる記念像を俟たずして

永遠に傳はるべきものである。むしろ此の像は、人間が彼等の最上の感謝に値するところの人々を尊敬するところを知つて居ると云ふ證據を示すために建てたものである。

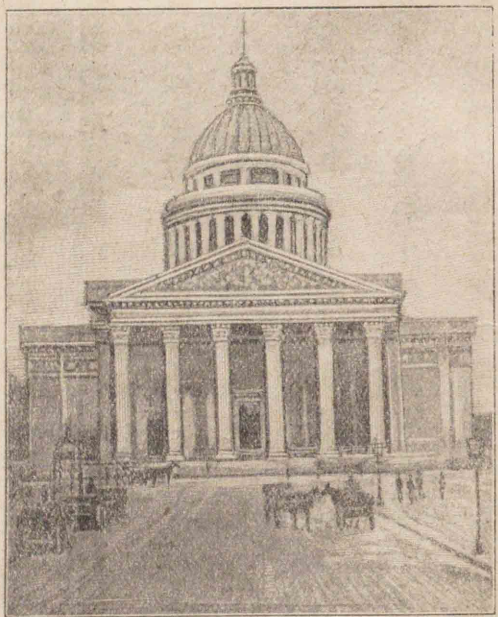
思ふに、彼の産業革命、延いて現代の物質的文明を人間化するれば、そこにジェームス、ワットの塑像が出来る。私は今親しく其の偉大なる塑像の前に立つて、彼の生涯を懐ひ、又産業革命の偉業を思つて、萬感の徂徠するに涙を催さんばかりである。記念像の下に彫りつけてある幾行かの文字も、實にゆかしきものである。私は行を追うて丁寧にか其の文句を手帳に寫し取りながら、日本にも若しかゝる場所があ



るならば、私は子供等の教育のため屢、そこへ連れて行きた  
いものだと思つた。

その後、私は巴里に移つて、パンテオンを見に行つた。こゝ  
ではその墳墓のある洞窟を見るのに、案内者に就かねばな  
らぬ。時を定めて案内者が観覽者を集める。其の時それ  
について入るのである。一人の案内者が何十人かの群を  
引連れ、薄暗い洞窟の中を、出来得るだけ急ぎながら、只時折  
立ちどまつて若干の説明をするだけなので、一分間たりと  
も落ちついて英雄の墳墓を仰ぎ、追慕の念を催し、懐古の情  
に耽る遣がない。これがルソ一の墳墓である、あれがヴォ  
ルテールの墳墓である、こゝにユーゴーが眠り、そこにゾラ

ルソ一  
佛國ノ哲學者  
(1712—1778)  
ヴォルテール  
佛國ノ文學者  
(1694—1778)  
ユーゴー  
佛國ノ思想家詩  
人  
(1802—1885)  
ゾラ  
佛國ノ小説家  
(184—1902)



ン オ テ ン バ 里 巴

が眠つて居ると云ふかと思へば、はや先頭は他の場所へと  
進むので、何一つとして頭に残りやうが無い。もうお仕舞  
だと見えて、そこに  
出口がある。戸の  
外に例の案内者が  
立つて、銘々から思  
召の金を貰つて居  
る。皆が金を遣る  
と、どうんと戸を閉  
めて錠を下す。それでお仕舞である。次にはまた何十人  
かの見物客を引連れて同じことを繰返す。此の如くにし



て、案内者のポケットは相當に膨れるのであらう。私は敢へて一法二法の金を惜しいとは思はぬが、何遍這入つても同じ事だから、巴里には七十日も居たけれど、二度とは行かなかつた。

ミラボー  
佛國革命時代ノ  
雄辯家  
(1749-1793)

マラー  
佛國ノ革命家  
(1744-1793)

此のパンテオンには嘗てミラボーが國葬された。しかるに其の國葬が營まれてから僅か三年目に、議會では、彼の骸骨を掘返して其の代りにマラーを葬ることを決議した。かくてミラボーの死骸は或夜、此のパンテオンから持ちだして或他の墓地に改葬された。マラーが暗殺された事は當時甚だしく巴里人の血を涌かしたものと見える。然るに此のマラーの死骸も、三ヶ月目に又此處を追出されて、他

の墓地に埋められる事になつた。えらい事をしたものだ併しそれが巴里人であり、それがパンテオンである。

ロダン  
佛國ノ彫刻家  
(1800-)

考へて見れば、此のパンテオンの墳墓室はやはり例の案内者について、出來得るかぎり遽しく見て廻るべき場所なのである。堂前に建てられてある「考へる人」と題するロダンの作品は裸體の男が左腕を膝に突き、掌を以て額を支へて居る銅製の巨像であるが、背面の建築と如何にも不調和に見える。併しパンテオンの歴史、巴里の歴史、從つて佛蘭西の歴史を知る者にとつては、此のロダンの作品こそ替へも動かしもならぬパンテオン堂前の闕くべからざる裝飾である。(祖國を顧みて)



カーライル  
 英國ノ文學者歴  
 史家  
 スコットランド  
 ニ生レテエルシ  
 ーニ歿シタ  
 (1795-1881)  
 チェルシー  
 倫敦ノ近郊テ  
 ムス河ノ北岸ニ  
 アル

九 カーライルの舊栖 夏目漱石

毎日の様に川を隔て、霧の中にチェルシーを眺めた余は或朝橋を渡つて其の有名なカーライルの舊宅を尋ねた。四階造の眞四角な家である。此の家の石階の上に立つて、鬼の面のノッカーをこつくと敲く。暫くすると内から五十恰好の太つた婆さんが出て来て、「おはひり」といふ。最初から見物人と思つて居るらしい。婆さんはやがて名簿の様なものを出して、「御名前を」といふ。余は倫敦滞留中、四たび此の家に入り、四たび此の名簿に余の名を記録したが、此の時は實に余の名の記し始めてあつた。

婆さんがこちらへといふから左手の戸をあけて町に向つた部屋にはひる。是は昔客間であつたさうだ。色々な物が並べてある。壁に畫やら寫眞やらがある。大概はカーライル夫婦の肖像の様だ。後の部屋にカーライルの意匠に成つたといふ書棚がある。それに書物が澤山詰つて居る。それから二階へ上る。こゝにも亦大きな本棚があつて、本が一杯詰つて居る。やはり讀めさうもない本、聞いたことのない本、いりさうもない本が多い。

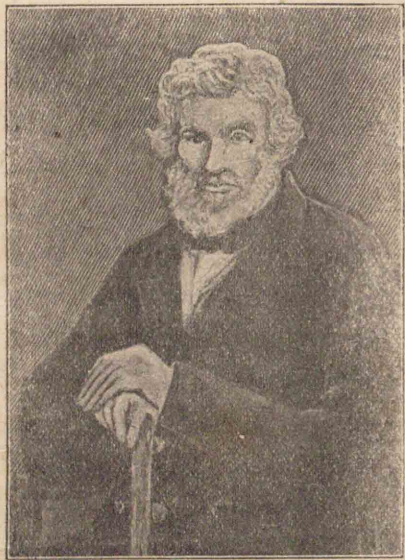
案内者はいづれの國でも同じものと見える。さつきから婆さんは室内の繪畫器具に就いて一々説明を與へる。五十年間案内者を専門に修行したのでもあるまいが、非常に



熟練したものである。何年何月何日にどうした、かうしたと恰も口から出任せに喋舌つて居る様である。しかも其の流暢な辯舌に、抑揚があり、節奏がある。調子が面白いから其の方ばかり聽いて居ると、何を言つて居るのか分らなくなる。婆さんは人が聽かうが聽くまいが口上だけは必ず述べますといふ風で、別段厭きた氣色もなく、何年何月何日をやつて居る。

余は東側の窓から首を出してちよつと近所を見渡した。眼の下に十坪程の庭がある。右も左も又向ふも石の高塀で仕切られて、其の形はやはり四角である。四角はどこ迄も此の家の附屬物かと思ふ。

カーライルいふ、裏の窓より見渡せば、見ゆるものは茂る葉の木株、緑なる野原、及び其の間に點綴する勾配の急なる赤き屋根のみ。西風の吹く此の頃の眺はいとはれやかに心地よし。余は「茂る葉



ルイライカ

を見たが、青いものも何も見えぬ。右に家が見える、左に家が見える、向ふにも家が見える。其の上には鉛色の空が一面

を見ようと思ひ、緑の野を眺めようと思つて、實は裏の窓から首を出したのである。首はすでに二遍許出



に胃病やみの様に不承無性に垂れかゝつて居るのである。余は首を縮めて窓から引込めた。婆さんはまだ何年何月何日の續きを朗に誦誦してゐる。

カーライル又いふ「倫敦の方を見れば眼に入るものはウエストミンスター、アベールとセント、ポール寺の高塔の頂のみ。其の他幻の如き殿宇は煤を含む雲の影の去るに任せて隠見す」。「倫敦の方」とは既に時代後れの語である。今日チェルシーに來て倫敦の方を見るのは、家の中に坐つて家の方を見ると同じ理窟で、自分の眼で自分の見當を眺めるといふのと大した差違はない。併しカーライルは自ら倫敦に住んで居るとは思はなかつたのである。彼は田舎に閑居し

て、都の中央にある大伽藍を遙に眺めた積りであつた。余は復首を出した。そして彼の所謂倫敦の方へと視線を延した。併しウエストミンスターも見えぬ、セント、ポール寺も見えぬ、數萬の家、數十萬の人、數百萬の物音は、余と堂宇との間に立ちつゝある、漾ひつゝある、動きつゝある。千八百三十四年のチェルシーとはまるで別物である。余は復首を引込めた。婆さんは默然として余の背後に守んで居る。三階に上る。部屋の隅を見ると、冷かにカーライルの寢臺が横たはつて居る。青い帳が物靜かに垂れて、空しき臥床の裡は寂然として薄暗い。木は何の木か知らぬが、細工は唯無器用で素朴であるといふ外に、何等の特色もない。其



の上に身を横たへた人の身の上も思ひ合はされる。傍には彼が平生使用した風呂桶が九鼎の如く尊げに置かれてある。

風呂桶とはいふものゝバケツの大きいものに過ぎぬ。彼が此の大鍋のなかで、倫敦の煤を洗ひ落したかと思ふと、益其の人となりが偲ばれる。ふと首を上げると壁の上に彼が往生した時に取つたといふ漆喰製の面型がある。此の人だと思ふ。此の巨燧位の高さの風呂に入つて、此の質素な寢臺の上に寝て、四十年間やかましい小言を吐き續けに吐いた顔は、これだと思ふ。婆さんの淀みなき口上が電話口で横濱の人の挨拶を聞く様に聞える。

階段を下りて、勝手口から庭に案内された。例の四角な平地を見廻して見ると、木らしい木、草らしい草は、少しも見えぬ。婆さんの話によると、昔は櫻もあつた、葡萄もあつた、胡桃もあつたさうだ。

カーライルが麥藁帽を阿彌陀に被つて、寢巻姿のまま、銜へ煙管で逍遙したのは此の庭園である。夏の最中には蔭深き敷石の上に、さゝやかな天幕を張り、其の下に机をさへ出して餘念も無く述作に従事したのも、此の庭園である。星明かなる夜、最後の服をのみ終つたのち、彼が空を仰いで、「嗚呼予が汝を見る時は瞬刻の後ならん」と叫んだのも此の庭園である。



余は婆さんの勞に酬いる爲に、婆さんの掌の上に一片の銀貨を載せた。「有難う」といふ聲さへ朗讀的であつた。一時間の後、倫敦の塵と煤と馬車の音とテームス河とは、カーライルの家を別世界の如く遠き方へと隔てた。(漱石全集)

坪内逍遙

名ハ雄藏

英文學者

劇作家

文學博士

早稻田大學名譽

教授

安政六年(一八二九)

生

明曆の大火

明曆三年(一三三七)

正月十八日江戸

本郷丸山ヨリ出

火江戸城類焼燬

死十萬人

### 一〇 大正の震災

坪内逍遙

明曆の大火に元祿安政の大震災を合せたともいふべきものが今度の大地震である。殊に物質上並に文化上の損失に至つては、全く類似のどの前例にも超越して居り、極言すれば日本始つて以來の大厄だと言つていゝくらゐである。江戸文明三百年の名残も明治五十年の東京の記念も悉く

元祿

元祿十六年(一三三三)

空(十一月二十

二日江戸地震火

事死者三萬餘人

安政

安政二年(一八二五)

十月二日江戸地

震火事死者無數

灰燼と化してしまつた。名所も古蹟も殆ど皆破壊し盡されて、剩す所は纔に淺草の觀音堂及び其の五重の塔と已に半分は昔の面影を失ひつゝあつた芝の増上寺ぐらゐのものである。謂はゆる目貫の場所は蕩然として跡を留めず、遺つて居るのは山の手と場末ばかり。昔を偲ぶよすがさへも今はもうなくなつてしまつた。長明が方丈記を書いた動機などもおのづとうなづかれる。

私ども學徒として殊に遺憾なのは此の後たとひ幾億金を積むとも復びは得難い大切な文獻を夥しく焼き失つたことである。由緒ある諸建造物をはじめとして名門富豪の寶庫の中に、書庫の中に、又は圖書館に珍藏されて居た古器



物記念品・古文書・古圖畫等の跡形もなくなつたことである。この焼野原が新東京と復活するまでにはいくら早くとも十六七年はかゝるだらう。その間各種の事業は物質的となく精神的となく或は頓挫し或は萎靡し或は永久に阻止されなわけにはゆくまい。明治以來駸々として進んだわが文化が此の世界的改造期に於て十六七年以上の停滯を餘儀なくせしめられることは非常に大きな損失であるが、此の類の損失は其の原因こそ異なれ、世界的戦亂に關係した國々の僅々一二を除くの外は之を分擔することを免れなかつた所であつて、特り我が國の不幸のみではないのみならず外國では此の種の不幸を或は戦禍として、或は

革命の結果として招き致したのであつたのだが、我が國は之を自然の暴虐によつて蒙つた爲に、其の惨害區域が比較的狭くてすんだともいへる。誰しも少し考へたらすぐに心づくことであらうが、今度の天災は逆も人力では爲し難かるべき、又は或は爲し得られるとしても、人爲となれば彼の十八世紀末のフランスに於ける、若しくは最近のロシアに於けるが如き種々の餘弊を伴ふ謂はゆる革命によらざるかぎりには爲し得難いことを驚くべく簡単に且惨烈に併しながら比較的餘弊少く天然力によつて爲し了つた概がある。即ち社會的に大死一番しない以上は如何ともすべからざるまでに至つて居た



處に向つて一大生面を打開したかの如き觀がある。成金の日本を僥倖と虚榮とで腐爛せんとして居た日本を、首府東京をして代表せしめて、大懲罰の鐵槌を眞向に打下して身心共に微塵となして淨裸々の原眞に歸らしむるの機會を供してゐるのだとも見られる。まことに今は世界の<sup>大過渡期</sup>であり、人間そのもの、根本的改造期である。列國共に現下の好機を逸せしめてはならぬのだが、就中わが同胞は今度のこの呪を轉じて一大祝福とするの工夫を怠つてはならぬ。かの全國に<sup>瀾漫</sup>しつゝあつた<sup>僭上</sup>虚榮<sup>奢類</sup>廢浮<sup>靡</sup>輕佻<sup>自大</sup>惰弱等の百弊千弊を矯治掃蕩するの機は、此の驚魂駭魄して漸く少しく其の原眞に目覺めんと

しつゝある現下を外にしていつの時にあらう。憎惡も嫉妬も偏執も猜疑も倨傲も輕蔑も僻みも羨みも其の甚だしい驚愕のために又悲嘆のために同じ運命の下に平等化された爲に比較的後方へ押除けられて、或は多少忘れられ或は多少緩和されてゐる。少くとも當分は東京の住民には階級別はないといつてよい。彼等の大多數は貧富の別なく有形の資産に關するかぎりにはほゞ一樣である。貴女も賤婦も概して一樣に着のみ着のまゝである。恐らく彼等の大多數はこゝ暫くは一樣にバラック住居をせねばなるまい。衣食住一切を必要本位の簡易生活ですまし、出入は徒歩、何事にも不自由だらけ。ブルジョアもプロレタリア



もあつたものでない。と兎に角感ぜられるだけでも各階級の反省を促す有利の機縁だと私は思ふ。年壯氣鋭の人たちをして、少くとも見た目だけでも、同じ扮装同じ出立點から何等のハンデキャップもなしに若しくは同じハンデキャップの下に同時にスタートを切らしめ得ることは、極めて有利な試鍊だと私は思ふ。が喉元過ぐれば熱さは又忘れられてしまふ。此の機逸せしむべからずである。あゝ併しながら、我が國も到頭これで世界的大戰禍の仲間入りをしてしまつた。遅ればせながら、恐しい目にあつたものだ。が必ずしも悲觀すべきでない。個人でも國家でも、とかく多幸多福であ

ると他人の又他國の嫉妬や憎惡を招く習だが、甚だしい災厄は敵人の僻み心をも和げることがある。で始めてお互に人間の眞情で交はり得られるのである。これで怨みつこがなくなつたからである。(週刊朝日)

一一 皇太后宮を悼み奉る 星野 恆

あはれ、明治天皇の御事ましく、追慕の涙未だ乾かざるに、今又皇太后宮の登遐を承りて、惶愕の心擣くが如し。臣民忽ち依恃を失ひ、天地重ねて諒闇に入る。嗚呼、哀しい哉。恭しく惟るに、皇太后宮徳を桃花殿に毓ひて位を長秋宮に正し給ひ、明治天皇登極の初、日本帝國維新の際、聖業を九重

星野恆  
漢學者  
歴史家  
文學博士  
東京帝國大學文  
科大學教授  
大正七年薨  
年七十九



の深きに翊けて仁風を四海の廣きに敷き給ひ、六千餘萬の衆庶、皆日月の光を齊へたるを仰ぎ、四十五年の歲月、長く雨露の恵に浴するを喜べり。あはれ、皇太后宮深仁叡德、田野の農民を憫ませ給ひては野分の風に稻葉の亂れを歎かせ給ひ、出征の將士を思ひやらせ給ひては大宮の中にも霜ふむ軍人の勞苦を體せさせ給へり。或はかしこき御巡幸の後を守らせ給ひて、霧立ちわたる荒海の上に御心を摧き、亡き功臣の跡を偲ばせ給ひて、烏羽玉の夜の御夢にさへ見そなはし給へり。女學校を興し教育を奨めて、屢、其の庭に臨ませ給へるは、檀林皇后の懿績にも超え、病者を勞り貧民を恵み災厄に罹れる者を卹み給へるは、仁正皇太后の慈範に

檀林皇后

嵯峨帝ノ后橘嘉

智子

學館院ヲ御設立

ニナツタ

仁正皇太后

聖武天皇ノ皇后

光明子ノ尊號

嘗テ悲田院施藥

院ヲ置イテ飢者

病者ヲ療養セサ

セラレタ

第一學期

試験問題

も勝り給ふ。後への政の御暇には、敷島の道を樂しみ、千鳥の跡をも尋ねさせ給ひて、德音萬首の上に出で、彝訓百世の後に垂る。眞に是、婦道の儀刑にして内教の粹粹なり。何れの國の國母にか又斯かる辱き大御心はおはしますべき。あはれ、明治天皇崩御の後、御哀傷は極りなかるべけれども、今上天皇踐祚ましく、御孝養至らぬくまなければ、上下皆寶算の窮りなからんことを祈り、内外齊しく慈光の愈遠からんことを冀ひ奉りしに、富士山の煙久しく絶えて靈藥復得べからず、靜浦の波二たび返らずして仙駕遂に停むるに由なし。臣等世々の史籍を繕き、古を稽へ今を察するにも、坤徳の雙びなくましますを慕ひまつれり。いかでか天

靜浦

駿河國沼津町ノ

東御用邸ヲアル

處



を仰ぎ地に伏して、聖壽の延べ難きを悲しまざらん。乃ち  
恭しく丹誠を布きて以て慟地の深哀を擧げ、蕪辭を捧げて  
以て在天の慈鑒を仰ぎ奉る。

史學會評議員長文學博士星野恆

寺門政次郎

名ハ謹

水戸藩士

漢學者

明治三十九年歿

年七十五

藤田東湖

通稱ハ虎之助後

誠之進ト改メタ

水戸藩士

勤王家

政治家

安政二年(三三)歿

年五十

慎中

弘化四年十月カ

ラ嘉永五年二月

マテ水戸ニ謹愼

ヲ命ゼラレタ

一二 寺門政次郎に答ふ

藤田東湖

一兩年以來十數度之貴翰、尙又時々預御惠投物、殊に當  
春梅花之御贈物等、實以御厚意不淺。僕が頑鈍狂愚、何  
故右様御眷顧被下候哉、不知所謝、汗顔ニ御座候。  
楮慎中は貴答延引も當然に候處、當二月幽厄を脱し候  
上は、早速一書を裁し、右數度の御厚意を謝し候筈之處

をいひんがし  
たふす  
あつた

弘道館

天保十二年水戸

藩主徳川齊昭ノ

開イタ學校

爾來僕が境界、實以寸暇も無之、尤日々夕刻大白を傾け  
候暇は有之候へども、其外は兎角閑隙を得ず。今日始  
めて及貴答候。

一、先年、弘道館にて貴兄御面貌は確に相覺え候。所謂  
嶄然頭角、今以心目に宛然に御座候處、追々御詩文等拜  
見、尙又御尊承知致候へば、近來益、御研精の由、憚ながら  
感心仕候。老人臭き申分には候へども、御國も學校御  
開以來、讀書家は悉く澤山に相成候へども、眞實の學者  
は寥々に御座候間、爲國家御勵精、御尤に存候。僕など  
は罪名載せて幕府の籍にある身分にて、天地之一棄人  
に候間、理窟がましきことは一切申間敷心懸候へども



放翁 宋ノ陸游 放翁 其ノ號 詩人 (一七六一一七六)

弘道館記 徳川齊昭ノ撰シ 且書シタモノ

放翁が申す如く、大義未曾忘君臣。之至情難默、且は度々之御細書、御深意をも推察致、旁心事略、吐露仕候。申す迄は無之候へども、學問は實學に無之ては、却て無學にも劣り申候。弘道館記中に「忠孝無二、文武不岐、學問事業、不殊其效」と被遊候儀、實に學者立志之模範、志士報國之根本に御座候はんか。今世、親孝行之様なれども、御奉公は出來ぬ風之人も相見え、又御奉公出來候様にても、父子之中とくと不致向も相見え候。此等決して聖人の道に非ずと存候。又少々書を讀み候へば、何か仔細らしき顔色を致、言語等漢文交りにしてしやらくさく候へども、劍槍等之藝一切出來不申、文弱白面之

筆蹟

鶴ヶ岡表學問所 御取建等之次第 色々御申聞にて 承知大慶いたし 候夫に付愚昧之 存意無伏藏申述 候其藩は祖徠の 學風盛にて二つ に分れ當惑被致 候との事御尤に 存候いかさま祖 徠の學は其弊不 少事に承及候し かし祖徠も流石 齋藤之由に候得 ば鶴岡の儒生皆 祖徠同様の人に 候はゞ又格別に 候得共孔子の道 すら後世に至り 候は而古註新註 其外種々の説有 之候得ば其藩の 學も只今祖徠再 來いたし候はゞ 祖徠の主意に叶 ひ可申哉否は安 心無之候愚昧事

鶴ヶ岡表學問所 御取建等之次第 色々御申聞にて 承知大慶いたし 候夫に付愚昧之 存意無伏藏申述 候其藩は祖徠の 學風盛にて二つ に分れ當惑被致 候との事御尤に 存候いかさま祖 徠の學は其弊不 少事に承及候し かし祖徠も流石 齋藤之由に候得 ば鶴岡の儒生皆 祖徠同様の人に 候はゞ又格別に 候得共孔子の道 すら後世に至り 候は而古註新註 其外種々の説有 之候得ば其藩の 學も只今祖徠再 來いたし候はゞ 祖徠の主意に叶 ひ可申哉否は安 心無之候愚昧事

(粘芳遺士志新録) 讀筆 瀬東 田 藤

書生と相成候儀 毛唐人ならば其にて宜しきかも 不相知候へども、 假初にも神州尙 武之域に生れ、且 は武家之飯を食 ひ候者は、右様白 面之書生は風上 へも置兼候事勿 論に御座候。武



淺學不才にて申  
も如何に候へ共  
學問は人の人た  
るゆゑんを學び  
候ためと存候人  
の人たるゆゑん  
は五倫の道明な  
るゆへと存候五  
倫の道は聖人の  
教

十七史  
史記  
後漢書  
三國志  
晉書

人之愚にも困り候へども、どちらと申候へば、寧ろ文弱の書生には勝り可申歟。併可成丈は、文武不岐兼備有之度事、是又勿論に御座候。學問・事業其效を殊にせざるに至り候ては中々難物也。僕が輩、頌白に相成候へども、今以學問・事業一致之場合に相成不申、乍不及心を用ひ候へども、修己治人の工夫、明倫正名之講究時々刻々離れ不申候は、貴兄などは妙齡の御事故、必ず學問・事業之一致も御出來被成候はん、隨分御研精御尤に御座候。一、讀書は博きを貴び候へども、うはすべり致候ては、何萬卷を讀み候とても用を成し兼候はんか。古人の所

宋書  
南齊書  
梁書  
陳書  
魏書  
北齊書  
周書  
隋書  
南史  
北史  
唐書  
五代史  
十一史  
十七史ニ次ノ四  
史ヲ加ヘル  
宋史  
遼史  
金史  
元史

東坡が漢書  
某續ニ漢書ニ至  
レ是凡三經ニ手  
レ抄ニ矣。初則一段  
レ抄ニ三字ニ爲  
レ題、次則兩字、  
今則一字。

謂眼光紙背に透る。と申す如く讀み度事に御座候。次第次第に後之世に生れ候程讀書多く相成申候。古人は六史か七史讀み候へば相濟み候が、十七史又は二十一史と申す様に相成、末が末に相成候は、三十史も五十史も讀不申候ては不相成譯合故、博きを貴び候中にも、その要を得候儀、肝要と存候。人之持前種々有之候故、一概には申兼候へども、歴史等も唯ばつと讀み候よりは何か一つ講究著述致す心得にて讀み候方、格別に益を得候様相覺申候。制度之事も、兵機之事も、文辭之事も、名君賢相の行狀其の外一々記憶可致と存候ては、大抵之人にては中々覺え兼申候。東坡が漢書を讀み



候法など面白く御座候。尚又御勘考御尤に存候。

英雄人を欺く  
七言古詩、惟子  
美不<sub>レ</sub>失<sub>二</sub>初唐氣  
格、而縱橫、有  
之。太白縱橫往  
往、強弩之末間  
猶<sub>二</sub>長語、英雄欺  
レ人耳。

東夷の人  
贊<sub>二</sub>孔子真<sub>二</sub>ニ、  
日本國夷人物茂  
卿拜手稽首敬題

一、文章は末藝に候へども、自分にて文を書き候位に無  
之候ては、經書も歴史も本當に解し不被申候間、隨分御  
餘力には御修行御尤に存候。但近來、長短句にてごま  
かし候詩流行致候處、唐詩選之序にも、李太白長語を用  
ひ候事を評して、「英雄人を欺くのみ」と申候。今之流行  
は凡庸人を欺くとも申すべく候。右之類は先々御稽  
古無之方と存候。  
一、慶元以來、人物如林、豪傑も追々に出で候處、其中にて、  
仁齋之學問、徂徠之文章、熊澤之經濟、新井之敏捷など、皆  
可畏存候。併右之内徂徠は更に名分を存ぜず、自ら東

司馬溫公

北宋ノ司馬光  
大師溫國公ヲ贈  
リ文正ト諡シタ  
政治家

學者

朱文公

南宋ノ朱熹  
徽國公ヲ贈リ文  
ト諡シタ  
儒家

儒家

韓魏公

北宋ノ韓琦  
魏國公ニ封セラ  
レ忠獻ト諡シタ  
政治家

政治家

夷之人と稱し候儀、不届至極に御座候。新井も才氣絶  
倫に候へども、東都を張立て候志は惡むべく候。さ候  
へば、今に在つては、右數子の長を取り、短を捨て、實學講  
究致し、孔子の遺意に叶ひ候様、御同意希望致度事に御  
座候。今世の儒者、動もすれば唐人の事は丁寧に申し、  
司馬溫公、朱文公、韓魏公などと稱へ、さて、新田義貞が云  
云、楠木正成が云々、など申候類甚不相濟。右様の人を  
ば、僕は毎々和唐人と唱へ申候。御一笑可被下候。其  
外、當世の學風、其弊不少候へども、逆も書中に盡し兼候  
故、先其一端を挙げ候而已に御座候。  
僕は最早貴地などへ出で候事は終身無之候間、拜面も



六ヶ敷候處、貴兄は御墓參、御對面等にて御歸郷も御自由故、若し來春など一寸御歸郷に相成候はゞ、種々存候丈の事は御切磋商可申候。先は今日は前文御申譯旁、一書を裁し候事に御座候。乍併御覽の通亂筆、無御讀兼被成候半と閣筆候。以上。

一三 借家大將

井原西鶴

井原西鶴  
元祿時代ノ小説  
作者  
元祿六年（二三  
五三）歿  
五十二年  
室町  
京都市烏丸通ノ  
西ノ通  
烏丸通  
今ノ京都驛ノ前  
ヲ北ニ通ズル通

室町菱屋長左衛門殿、借家に居申され候藤市と申す人、慥に千貫目御座候。廣き世界にならびなき分限、我なりと自慢申せし。仔細は二間口の棚借にて千貫目持、都の沙汰になりしに、烏丸通に三十八貫目の家質を取りしが、利銀つもり

ておのづから流れ、始めて家持となり、是を悔みぬ。今までは借屋に居ての分限といはれしに、向後、家有るからは京の歴々の内藏の塵埃ぞかし。

此の藤市利發にして、一代のうちに斯く手前富貴になりぬ。第一、人間堅固なるが身を過ぐる本なり。此の男家業の外に反故の帳をくゝり置きて見世をはなれず。一日筆を握り、兩替の手代通れば、錢小判の相場を附置き、米問屋の賣買を聞合せ、生藥屋、呉服屋の若い者に長崎の様子を尋ね、繰綿、鹽酒は江戸棚の狀日を見合せ、毎日萬事を記し置けば、紛れし事は爰に尋ね、浴中の重寶になりける。不斷の身持、肌、單襦袢、大布子綿三百目入れてひとつより



海松茶染  
海松ノヤウナ黒  
ミガカツタ茶色  
デ染メカヘシノ  
キカヌ色

外に着ることなし。袖覆輪といふこと、此の人取りはじめ  
て、當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪踏をは  
きて、終に大道を走りありきし事なし。一生の内に絹物と  
ては海松茶染にせし袖一つ。若い時の無分別と、二十年も  
是を悔しく思ひぬ。紋所を定めず、土用干にも疊の上に直  
には置かず、麻袴に鬼縑の肩衣、幾年か折目正しく取置かれ  
ける。  
町並に出づる葬禮には、是非なく鳥部山に送りて、人より跡  
に歸りざまに、六波羅の野道にて丁稚もろとも當藥を引い  
て、是を蔭干にして、腹藥なるぞと、只は通らず、躓く處で燧石  
を拾ひて袂に入れける。朝夕の煙を立つる世帯持はよろ

大佛  
京都方廣寺ノ大  
佛

づ斯様に氣を附けずしては有るべからず。  
此の男、生れついて吝きにあらず。萬事の取廻し人の鏡に  
もなりぬべき願、かほどの身代まで年とる宿に餅搗かず。  
忙しき時の人遣ひ、諸道具の取置もやかましきとて、是も利  
勤にて大佛の前へ誂へ、一貫目に付何程と極めける。十二  
月廿八日の曙、いそぎ荷ひつれ、藤屋見世にならべ、請取り給  
へ。といふ。餅は搗きたての好もしく春めきて見えける。  
旦那はきかぬ顔して、十露盤置きしに、餅屋は時分柄にひま  
を惜み、幾度か斷りて、才覺らしき若い者、ちきの目りんと請  
取りてかへしぬ。一時ばかり過ぎて、今の餅屋請取つたか。  
といへば、はや渡して歸りぬ。「此の家に奉公する程にもな



東寺  
京都ノ南端九條  
ニアル

き者ぞ。 温もりのさめぬを請取りし事よ。と、又目を懸けしに、思の外に減ぐのたつこと、手代我を折つて、喰くひもせぬ餅に口をあきける。

其の年明けて、夏になり、東寺あたりの里人、茄子かしらの初生はつせいを目籠に入れて賣り來るを、七十五日の齡、これ樂みの一つは二文、二つは三文に直段を定め、何れか二つ取らぬ仁はなし。藤市は一つを二文に買ひていへるは、今一文で、盛なる時は大きなるが有り。と心を附くる程のことあしからず。

屋敷の空地に柳やなぎ・柊はらばら・葉桃はなつばなの木、花菖蒲はなしょうぶ・薺なづな・苡仁いじなど取りまぜて植置きしは、一人ある娘が爲ぞかし。葭垣やがきに自然と朝顔のはひかゝりしを、同じ眺めにははかなき物として刀豆たなまめに植

ゑかへける。

何より我が子を見る程面白きはなし。 娘大人しくなりて頓て嫁入屏風を拵へとらせけるに、洛中盡を見たらば、見ぬ處を歩きたがるべし。 源氏・伊勢物語は心のいたづらになりぬべきものなりと、多田の銀山かたぎやま出盛りし有様書かせける。此の心からはいろは歌を作りて誦ませ、女寺へも遣らずして筆の道を教へ、ゑひもせず、京のかしこ娘となしぬ。

親の世智なる事を見習ひ、八歳より墨に袂をよごさず。 節句の雛遊をやめ、盆に踊らず。 毎月髪かしらも自ら梳きて丸鬘まるまげに結ひて身の取廻し人手にかゝらず。 いづれ女の子は遊ばすまじきものなり。

多田の銀山  
攝津國河邊郡多  
田村ニアル古イ  
鏡山  
伊丹ノ北二里餘



折節は正月七日の夜、近所の男子を藤市方へ長者になるやうの指南を頼むとて遣はしける。座敷に燈かゝやかせ、娘を附け置き、露地の戸の鳴る時しらせと申し置きしに、此の娘しをらしくかしまり、燈心を一筋にして物申の聲する時、元のごとくにして勝手に入りける。三人の客座敷に着く時、臺所に挿鉢の音響き渡れば、客耳を悦ばせ、是を推して「皮鯨の吸物」といへば、「いや〜」始めてなれば雑煮なるべし」といふ。又一人はよく考へて「煮麵」と落着きける。必ずいふ事にしてをかし。

藤市出でて三人に世渡の大事を物語して聞かせける。一人申せしは「今日の七草といふいはれはいかなる事ぞ」と尋

ねける。「あれは神代の始末はじめ、増水といふことを知らせ給ふ」。又一人、掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるは「と尋ぬ。あれは朝夕に着を食はずに、是を見て食うた心せよ」と云ふ事なり。又太箸をとる由來を問ひける。「あれは穢れし時、白げて一膳にて一年中ある様に、是も神代の二柱を表すなり。よく〜萬事に氣を附け給へ。儲宵から今まで各話し給へば、最早夜食の出づべき處なり。出さぬが長者になる心なり。最前の挿鉢の音は大福帳の上紙に引く糊を挿らした」といはれし。（日本永代藏）

一四 千里が竹

近松門左衛門

近松門左衛門  
元祿時代ノ戯曲  
作者  
享保九年（一三三〇）  
歿  
年七十一



親子  
鄭芝龍トソノ子  
鄭成功

李蹈天

明朝ニ仕ヘテ右  
軍ノ將トナリ後  
鞆韃ニ内應シテ  
明帝ヲ弑シタ

吳三桂

明朝ノ忠臣  
仕ヘテ司馬大將  
軍トナツタ

天啓五年

明ノ熹宗ノ年號

(一三六)

娘  
錦祥女

船路の末も知らぬ火の筑紫は雲に埋めども、あとに擁護の神風や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子の船、唐土の地にぞ着きにける。鄭芝龍一官は、故郷へ歸る唐錦、裝束引きかへ妻子に向ひ、「わが本國といひながら、時移り代變り、天下悉く李蹈天が引入れて、鞆韃夷の奴となり、昔の朋友一族として誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂が生死のありかも知れざれば、何を以て義兵の旗を擧げ、何處を一城にたて籠るべき處もなし。然るに某去んぬる天啓五年、この國を立ちのき日本へ渡る時、二歳になりし娘の子を乳母が袖に捨ておきしが、その子が母は産み落して當座に死す。かくいふ父は八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身

甘輝  
明ノ將軍後鞆韃  
ニ降ツタガ間モ  
ナク復之ニ叛イ  
テ鄭芝龍ニ應ジ  
タ



(藏館物博室帝)門衛左門松近

が育てば育つ草木の雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今吳將軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となるよし、商人の便に聞及ぶ。頼む方はこればかり。親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、聳の甘輝も安々と頼まるべし。これより道の程百八十里、打連れては人も怪しまん。われ一人道をかへ、和藤内は母を具し、日本の漁船の吹流されしと頓智を以て人家に憩ひ、



東坡  
宋ノ蘇軾  
(二六一六)

追ひ附くべし。これより先は音に聞ゆる千里が竹とて虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江。是狸々の栖む處。風景聳えし高山は赤壁とて昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて待揃へ、萬事を示しあはすべしと、方角とてもしら雲の日影を心覺えにて、東西へこそ別れけれ。教に任せ、和藤内、人家を求め忍ばんと、かひとしく母を負ひ、たつきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧つ波、とび越えはね越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて浩々たる千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうと我をぬかし、のう母ぢや人、この脚骨たねに覺えたり、もう四五十里も來ま

虎嘯けは  
虎嘯谷風起、  
龍興景雲浮。

せうが、人にも猿にも逢ふ事か、行けば行く程藪の中。うゝ分つたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ。宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴と、根笹大竹押分け踏分け、尙奥深く行くさきに、怪しや數萬の人聲、攻鼓、攻太鼓、喇叭ちやるめら、高音をそらし、ひようくとこそ聞えけれ。「すは、我々を見答めて、敵の取巻く攻太鼓か、又は狐のなすわざか」と、茫然たるその折節、空凄じく風起り、沙を穿ち、どうくく、竹葉さつと卷立てく、吹折る竹は劍の如く、凄じなんどもおろかなり。和藤内ちつとも臆せず、讀めたりく。さては異國の虎狩な。あの鉦太鼓は勢子の者。こゝは聞ゆる千里が原。虎



楊香  
晉ノ人赤手デ虎  
ヲ搏ツテ父ノ厄  
ヲ救ツタ

嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は孝行の徳に因つて自然と逃れし惡虎の難。その孝行には劣るとも、忠義に勇むわが勇力。唐へ渡つて力始め、神力ますます日本力。又で向ふは大人氣なし、虎はおろか、象でも鬼でも一挫ぎと、尻ひつからげ身繕ひ、母をかこうて立つたるは、西天の獅子王も畏れつべうぞ見えてける。

案に違はず、吹く風と共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に頬を摩り附け、岩角に爪磨ぎ立て、二人を目がけ、唾み懸るを事ともせず、弓手に撲り、馬手に受け、振つて懸れば、身をかはし、撓めば、ひらりと乗移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえい、虎の怒り毛、怒り聲、山も崩る、如

くなり。和藤内も大童、虎も半分毛を筆られ、兩方共に息つかれ、石上に突つ立てば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたるその響、鞆吹くが如くなり。

母藪蔭より走り出で、やあ、和藤内、神國に生れて神より受けし身體髮膚、畜類に出合ひ力立てして怪我するな。日本のは離るゝとも、神はわが身にいすゝ川、大神宮の御祓、納受などか無からんや。と、肌はだの護符まごころを渡さるれば、げに尤、と押戴き、虎に差向け、差上ぐれば、神國神祕のその不思議、たけりに猛る威勢いきほひも、忽ち尾を伏せ、耳を垂れ、じり、と四足を縮め、恐れわな、き岩洞に匿れ入るを、づつを攫んで跳ね返し、打伏せ、ひるむところを乗つか、り、足下にしつか



とふまへしは、天の斑駒、素戔男尊の神力、天照す神の威徳ぞ有難き。

かゝる所に勢子の者群り來るその中に、大將と覺しき者大音あげ、「やあく、うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。その虎は忝くも主君右將軍李蹈天より韃靼王へ献上のため狩出したる虎なるぞ。早々渡せ。異議に及ば、打殺さん。しやくわんく」とわめきけり。李蹈天と聞くよりも、願ふ所と笑壺に入り、「やあ、餓鬼も人數しをらしい事ほざいたり。身が生國は大日本。風來とは舌長し。さほど欲しがる虎ならば、主君と頼む李蹈天とやら、石花菜とやら、茲へ突出し詫言させい。ぢきに逢うて用もある。さもない内

はいかなこと、ならぬく」とねめつくる。「やあ、ものないはせそ。討取れ」と一度に劍をばらりと抜く。「心得たり」と護符を虎の首にかけ、母の側に引据うれば、繋ぎし如くに働かず。「おゝ心易し」と太刀差翳し、群る中へ割つて入り、八方無盡に割りたてく、撫でまくる。

勢子の大將安大人、官人引具し立歸り、「おのれ老耄餘さじ」と一文字に切りかゝる。猶も神明擁護の驗、神力虎に加つて、むつくと起きて身震ひし、敵に向ひ齒を鳴らし、猛りうなりて飛蒐る。「こはかなはじ」と安大人、勢子の者が差いたる劍、かり銚數鎗、手にあたるを幸に、投附けく、打ちかくる。虎は神力自在を得、劍を宙に引つくはへく、岩に打當て、微塵



になす。刃の光、玉散る霰、氷を碎くに異ならず。打物盡くれば、官人ども、色めき立つて逃げまどふ。後より和藤内、どつこい遣らぬと顯れ出で、安大人が素首そくびを擱おんで差上げ、くるくると振廻し、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにける。

此の勢に官人ばら、後へ戻れば悪虎の口、先へ行けば和藤内、仁王立に突つ立つたり。「あゝ、申し御堪忍。御免々々」と手を合せ、土に喰ひつき泣きみたり。和藤内虎の背を撫で、「うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手並を覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴、九州平戸に生長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮梅檀皇

女にめぐり逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命惜しくば味方につけ。否といへば虎の餌食。否か、應か」と詰懸くる。「喃、何の否で御座りましよ。韃靼王に従ふも、李蹈天に従ふも命が惜しさ。向後お前の御家來ども。お情頼み奉る」と地に鼻つけて畏る。「おゝ、出來したゝ。さりながら我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はんと、差添の小刀外させ、是も當座の早剃刀、母も手々に受取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端そるやらこぼつやら。絲鬢、厚鬢、剃刀次第。瞬く隙に剃りしまひ、二櫛半のばらけ髪。頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合せて、頭



冷つく風引いて、噫々、村雨々々と、涙を流すぞ道理なる。  
 親子どつと打笑ひ、揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて、  
 何左衛門・何兵衛太郎次郎十郎迄、面々が國所頭字に名乗り、  
 二行に立て、ぼつたてる。「承り候」と、お先手の手振の衆、ち  
 やぐちう左衛門・東蒲塞右衛門・呂宋兵衛・東京兵衛・遠羅太郎  
 占城次郎ちやるなん四郎ほるなん五郎うんすん六郎すん  
 吉九郎もうる左衛門ぢやが太郎兵衛さんとめ八郎英吉利  
 兵衛、今參のお供先跡に引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の名  
 を取る、口取る、國を取る、譽は異國、本朝に踏跨げたる鞍、鐙、虎  
 の背中に打乗つて威勢を千里に顯せり。(國姓爺合戦)

一五 菅の荒野

賀茂真淵  
明和六年(一四六)  
歿 年七十三

賀茂真淵

信濃なる菅の菅野をよぶ就るの  
 つはさもたわやい、吹く嵐かな

小澤蘆庵  
享和元年(一四六)  
歿 年七十九

小澤蘆庵

大堰川月と花とのおぼるる夜ふ  
 ひどり霞まぬ浪のおどかな

加藤千蔭  
文化三年(一四六)  
歿 年七十二

加藤千蔭

湯田川みのきとくたす茂師ふ



村田春海  
文化八年(西曆)  
癸卯年六十六

かきむしあし ちかき雨をききし  
心あてふ見しらやきはふもよみて  
村田春海

清水濱臣  
文化七年(西曆)  
癸卯年四十九

おもしろき空をけりけり富子のね  
清水濱臣

香川景樹  
天保十三年(西曆)  
癸卯年六十八

つらふり駒うちつらむ佐保川の  
香川景樹

橋曙覽  
明治元年癸卯  
年五十七

さねはうはらうさくらあはれ  
橋 曙 覽  
はねならす蜂あはれかふみなをきき  
窓をうつめてさくらをうつひらふ

一六 江戸時代の文學

江戸幕府の世は泰平打續きて、殆ど兵戈の動くを見ず、文化の進歩前古に比なし。學問藝術上下に弘通して、四民ともにその澤を享け、文學の滋味も普く世に味はるゝに至れり。されど幕府の施設漸く成るに従うて、戰國の世に壞れかゝ



りし階級の制も更に立ち、従うて文學にも貴賤の別なきを得ず。上流の人は詩歌を詠じ、下流は俳諧を遊び、彼は學問にわたるものを喜び、此は戯曲・小説の類を愛し、彼は古文を墨守して固陋に流れ、此は新作に傾倒して卑俗に陥る。學識あるものは新興の文學を卑し、新興の文學に就くものはみづから卑うして高尚なる趣味を解せず。かくて戯曲・小説の如きは戯作を以て目せられて、正當なる文學上の地位を得ること能はざりき。

江戸時代の前期は京阪を中心とせる文學にして、寛永に萌し、元祿をその盛時とす。所謂元祿文學なり。後期は江戸を中心とせる文學にして、寶曆寛政を経て文化・文政をその

朱舜水  
名ハ之瑜  
天和二年(一六八二)  
歿  
年八十三

下河邊長流  
貞享三年(一七二六)  
歿  
年六十三

釋契沖  
元祿十四年(一七〇三)  
歿  
年六十二

絶頂とす。所謂大御所時代の繁昌は文學にもあらはれたるものなり。今、江戸時代の文學を左に概説せん。

一、國學 元祿時代に於て和漢の文學に大功ありしを水戸侯徳川光圀とす。明の遺臣朱舜水を聘して學を講ぜしめ、又彰考館を開き、儒臣を集めて大日本史を撰す。その學の重んずる所、大義名分を正すにありき。光圀また古典の研究に志あり。下河邊長流に託して萬葉集を註釋せしむ。長流歌文に通じ、中古以來の僻説を捨て、先人未發の見を立つ。不幸業を終へずして歿し、釋契沖その業を繼ぎ、萬葉代匠記を著す。契沖國文を好み、造詣至りて深く、識見世に絶す。奈良文學の眞價は契沖によりて始めて闡明せられ



荷田春滿  
元文元年(三六〇)  
歿  
年六十九

たるなり。  
享保の頃、京に荷田春滿あり。國史・律令に通じ、古意を明らかにするを以て己が任とす。いはゆる國學とて、古典を究めて國體のある所を學ぶは、この人に起れるなり。幕末勤王攘夷の説の沸騰せるは、水戸の學と國學との感化與りて力ありき。

田安宗武  
八代將軍徳川吉宗ノ子  
田安家ノ祖  
明和六年(四三九)  
卒  
年五十四

賀茂眞淵は遠江の人、京に出て春滿に學び、學成りて後、江戸に來りて講説し、田安宗武に仕へて厚遇せらる。その學は春滿に繼いでわが國固有の道（たも）を明かにするにあり。謂へらく、昔、儒佛の教の傳はりしより古道はこれが爲に廢れぬ。故に古道を明らかにせむとせば、外國の影響なくして人意



の自然に出でたる古書を學ばざるべからず。その古書は萬葉集最も善しと。よりて深くこの書を究む。識見甚だ高しと雖も、詩文の才は寧ろ學問に勝れり。門下に高材の士多くして、これより國學の勢、天下を席卷するに至れり。眞淵の門人多きが中に、伊勢の本居宣長、江戸の加藤千蔭、村田春海等最も名あり。宣長の學は一に古道を明らかにするにあり。古道を知るには古事記最も貴ぶべしとして、その註釋に従事し、三十四年を経て業成る。即ち古事記傳にして、以てその深遠なる學と穩健なる見とを見るべく、實に契沖の萬葉代匠記とあはせて江戸時代國文學界の二大作家たり。宣長なほ多くの著述あり。門流甚だ盛なりしが、歿後の弟



平田篤胤

天保十四年(二五〇)

三〇歿

年六十八

子平田篤胤最も著る。篤胤は出羽の人。その意宣長より一步を進めて、古道を以て一の宗教とし、之を弘布して、儒佛の教を斥けんとするにあり。勤王攘夷の説はこれらの論によりて益、刺戟せられたり。當時、京の文壇は寂寥たりしかども、香川景樹の歌道を一新したる功は特筆大書せざるべからず。景樹の歌論は、意は古の誠實なるに倣ひ、詞は今の通じ易きを取り、殊に聲調を重んずべしといふにあり。その派を桂園流といひ、大いに世に行はれたり。

二、俳句 俳句は元祿のころ伊賀の人松尾芭蕉京に出でて北村季吟に學び、後江戸に來りて正風を起し、また東西に周遊して吟腸を養ひ、その風を擴む。詠ずる所人事よりも自

北村季吟

寶永二年(三六五)

歿年八十二

與謝無村

天明三年(四四三)

三〇歿

年六十八

横井也有

天明三年(四四三)

三〇歿

年九十二

然に多く、幽玄清淡にして廣く雅俗にわたる。四方翕然として靡き、俳句これより遍く都鄙に行はる。門人に俊秀の士多し。その後、風調漸く卑俗に流れしかば、天明の頃、これを慨して革新を唱ふるもの東西に起れるが中に、京の與謝無村その最たり。無村好んで自然の景物を詠じ、漢詩の趣を傳へ、またよく歴史的事實を材料とす。芭蕉と相並んで斯道の二聖とすべし。横井也有は尾張侯の臣、其の俳文は特に淡雅輕妙を以て聞ゆ。

三、戲曲 戲曲は謠曲等より出で、江戸時代に至りて大いに發達せり。元祿の頃近松門左衛門あり、京に住み、のち大阪に移り、盛に戲曲を作る。寫す所、人情の祕奥を穿ち、才藻涌



竹田出雲  
享保十二年(三)  
七  
年八十一

くが如く、行筆の自在なること行雲流水に似たり。ついで竹田出雲あり、文才は門左衛門に及ばずと雖も、趣向の變化に富めることは却て之に勝れり。今日世に行はるゝはその作に多し。

四、小説は元祿の頃、京阪に榮えたり。井原西鶴大阪に出でて、從來の幼稚なる小説を一轉して、巧に世間の風俗人情を寫せり。その文輕妙奇抜にして、法格に拘はらず、社會の裏面を描きて微細を極む。文化、文政の頃に至り、江戸に作者輩出せり。中にも曲亭馬琴は學問該博にして、文藻絢爛なり。椿説弓張月、里見八犬傳等、その作の人口に膾炙するもの多く、一篇出づる毎に、世人争うてこれを求む。そ

曲亭馬琴  
瀧澤解  
嘉永元年(五)  
年八十二

の趣、一に儒教によりて勸善懲惡を旨とせり。

之を要するに、江戸時代ばかりその量に於てもその質に於ても、上下貴賤各種の階級に通じて、豊富なる文學を供給せるは前後に比なし。而して又その形式、内容共に先例の桎梏を脱し、直接に自然と人生とに應接して自由にその感想を述べ、以て能く現代文學を産み出すに至れり。

(新體日本文學史教科書に據る)

### 一七 旅行

山路愛山

風水相撃ちて波を爲す。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものに非ず。我をして自ら進んで自

山路愛山  
名ハ彌吉  
評論家  
大正六年歿  
年五十四



白河の關  
都をば霞と共に  
立ちしかど秋風  
ぞ吹く白河の關  
(能因法師)

必<sup>?</sup>く<sup>?</sup>！

然の中に住せしめよ、自然も亦旋りて我の中に住むべきなり。我動けば自然も亦動く。我の中に在る天才は自然の光景に觸れて始めて感興涌出す。昔は一室に坐して秋風白河の關を詠じたる人もあり、坐ながらにして名所を知れる歌人もありき。而も是自然の神髓に達すべき道には非ず。自然は唯質問を發するもののみ答辯を與へ、來りて見るもののみ教訓を與ふるものなり。  
試に千山萬水を跋涉し、而して後首を回らして故郷を見よ。如何なる感情の此の間に生ずべきか。幼時より爛熟したる某山某水は始めて遙なる天に輝ける星の下の物となるに非ずや。心なくして飛ぶ雲も夕日も波濤も人をして故

郷を聯想せしむる媒介となるに非ずや。無趣味なる青空も、故郷の方の天とし云へば大いに詩趣を生ずるに非ずや。人は自ら廻轉して自然も亦其の態を變ず。昨日天邊の寸碧は今朝杖底の千岩なり。今朝杖底の千岩は即ち明日亦天邊の寸碧なり。甕中に在る者は甕の大小を知らず。身を轉じて甕外に在り、始めて甕の全形を知る。故郷とは何ぞや。現在の自己より過去の自己を眺むる感興なり。我は嘗て蜻蜒を釣らんとして野外に遊びたる小兒なりき。溪流に網を投じて魚を捕へたる頑童なりき。其の岸に垂れたる楊柳、其の野に咲きたる杜鵑花、我は毫も其の奇なるを感じざりき。然れども我は故郷を去りて天涯の遊子と



なれり。位置と境遇とを異にせる我は始めて過去の位置と境遇とに在りし我を客觀的に見ることを得たり。而して嘗て我を園みて而も我に感興を與へざりし自然は、始めて我をして涙を零さしむるものとなれり。是旅行が吾人に與ふる詩趣の中に於て最も味あるものに非ずや。

舟に棹さして長き川を下れば、四山の面目畫屏の如く、時若し夏の初ならば、杜鵑花霧島紅の雨を降らし、時もし秋ならば、兩岸の蘆荻風に鳴る。時々刻々に變化する光景人をして知らず覺えず自然の吸引する所たらしむ。若しくは放翁の歌へる如く、山重水複疑無路、柳暗花明又一村、前面に鬱鬱たる山あり、舵師棹を暗中に揮ふ、前途既に窮するが如し、

放翁  
宋ノ陸游  
詩人  
(二七六一—二七〇)

忽ちにして山廻り、天濶く、雞犬聲あり、田畝開け、桃源一村、人をして世界の霽明を歌はしむるものあり。此の時此の情果して如何ぞや。或は天寒くして毛氈に身を包み、柔櫓の聲に眠を催しながら、覺むるが如く、眠るが如く、有るが如く、無きが如き間に於て、須臾に變じ行く兩岸のパノラマを樂しむが如き、如何に没風流の徒と雖も、終に黄金以外眞の娛樂あることを知るに至るべきなり。

朝まだき旅立すれば、駒の歩に連れて茅屋の軒も動き、絲の如くなる炊煙後に、颯き、清爽の氣身を襲ひ、殘月彼方の山の端にかゝり、村里は靄の中に在りて、覺めず、歩々光と暗とが地歩を争ふが如き、又微雨の蕭々たるに歴史ある古寺を訪



夏草や  
松尾芭蕉ノ句

へば、蝸牛壁に紋を畫きて自ら多年風雨の侵蝕せるを示したる、若しくは夕陽に馬を下りて古英雄の廟を弔へば、  
夏草や、つはものどもが夢のあと。  
何とも名狀すべからざる幽懷を生ずるが如き、是皆旅行に非ずんば得べからざるものにあらずや。

羽蟻  
與謝蕪村ノ句

羽蟻飛ぶや、富士の裾野の小家より。  
一面の平湖鏡の如き浮島ヶ原、其の南を縫へる松林の東海道、總べて是一幅の畫圖なり。春天穩かにして富士嵐到らず、空氣は漣漪だになき水に似たり。忽ち見る羽蟻の飛ぶを。靜中纔に動あり、駘蕩の春色寫し得て眞に迫る。此豈一室に坐して冥想する者の解し得る所ならんや。

旅行の妙趣は登臨を以て最も大なりとす。青竹を杖づきて五千尺以上の高山に上り、而して下界を見よ。數個の山脈は蛇の如く邑を圍み、州を隔て、營々たる人間恰も蟻垤の如くに見ゆるのみならず、造化の大經濟も亦雙眸の外に漏れず、山河の配置自ら天命を示せり。乾坤大なりと雖も、悟了すれば浮動の原素に過ぎず。アトムとアトムと相撃ち相觸れ、紛糾錯綜したる混沌の状態たるに過ぎず。劉は起りたり、項は亡びたり、シーザーは生れて死したり、帝國も覇圖も俯視すれば唯一氣のみ。東坡の山川與城郭、漢々同一形。市人與鵝鵠、浩々同一聲。と歌へるは眞なり。故に山に上るは一の哲學なり、高山の絶頂に坐するものは即ち哲



學の講壇に坐する者なり。

人は永久無限を慕ふ者なり。人の此の世に於ける境界は有限なり。然れども彼は無限の中に生まれたる者なるが故に無限は其の欲望なり。雲雀よりも高き峠に息らひて身を雲の中の人となし、世界の彼方より此方に旅行する鳥の行方を眺むれば、無限の渴望を慰せらるゝことなきを得ず。白雲のたなびく山のあなたにも國あり、遙なる嶺の外にも鳥の住むべき里あり。

天つ雲ひとつに見ゆるこしの海の浪をわけてもかへるかりがね。

天青くして雨は雁の背より霽れたり。自然の家には住む

天つ雲  
源頼政ノ歌

べき舎多きかな。人間豈塵界の爲に繩せらるべけんや。此の意義に於て自然は人をして無限ならしむるものなり。是、旅行より學び得たる自然の教訓に非ずや。愛山文集

一八 富士山

土井晚翠

見おろせば雲の大海、見あぐれば

雲の大空、風寒き

夏八月の富士の頂

石室をゆりて虚空に吼ゆる風

肌つんざきて冬王の

威を八月の峰に示せる。

土井晚翠  
名ハ林吉  
英文學者  
詩人  
第二高等學校教  
授  
明治四年生



見渡せば寶永山の頂に

虹ぞ懸れる、しばしのま

富士の高嶺に雲霽るゝ時。

夜半の空に聞くは天鷲、すゞろにも

わがファンダジイ、青鸞と

黄鶴嶺に舞ふと夢みる。

石室の夜半の夢覺め、恍として

下界に吹かぬ咆哮の

富士の高嶺の嵐を聞きぬ。

頂を降りて一夜を石室に

過し、古人の句を思ふ、

「二燈人は坐す、白雲の中。」

たそがれの暗迫り來て、千仞の

黒き峰筋矢の如く、

目路貫きて、末雲に入る。

雲の海、雲の大波、へだつれど、

何かはあらん、脚の下、

十三州のあけぼのを見る。 (曙光)

一九 賀茂眞淵

伴 蒿 蹊

眞淵は姓賀茂、縣主岡部衛士と名のる。遠州濱松の人。春  
滿に従ひ、家僕のごとくして京都に學ぶこと年あり。學成

伴蒿蹊  
名ハ養芳  
江戸時代後期ノ  
國學者  
文化三年(一八五六)  
歿  
年八十八



在滿

荷田春滿ノ甥  
江戸時代前期ノ  
國學者  
寶曆元年(二四二)  
歿  
年四十六

りて江戸に下り、大いに古學を唱ふ。春滿は萬葉の辭に功ありといへども、歌はその風をよまず。在滿は萬葉の頃は文華未だ開けず、歌の盛は新古今集の時なり。といへり。眞淵に及びて、始めて萬葉の風を詠みうつし、文章も亦古言をもて綴り、一家を成し、世の耳目を驚かす。従ひ學ぶもの多し。その説に「契沖は新墾しつれど、未だよく植ゑつくさぬ程に過ぎしこそ惜しけれ。大人は歌のみかは、舊りぬるたゞの書どもをあらすきかへし、いたづきのかひさはなれども、まだ刈りをさめ果てざるに病に臥しつ。」などいひて、おのれ是がなりはひを遂ぐるよしなり。實に古を發揮して後生を誘ふ功少からず。其の證をいはゞ、或時南郭服部氏を訪

南郭服部氏

名ハ元喬  
荻生徂徠ノ門人  
古文辭家  
寶曆九年(二四九)  
歿  
年七十七

筆蹟

橋のぬし子うま  
せ給ふに文月十  
三夜ばかり人々  
集りてよるこび  
いふ 月のおも  
しろかりければ  
眞淵  
此宿にさゝら愛  
男生さきの光り  
こもれる千代の  
初秋

賀茂眞淵筆蹟 (東京帝國博物館藏)

ひて物語らふついで「唐詩の風韻衰へて六朝に及ばぬは汾上驚秋」の詩にて知りぬ。といふ。南郭いかにと問ふ。「さればよ、北風吹白雲、萬里度河汾」といへる起承の句、誠に羈旅の秋情いはん方なきに、心緒逢搖落、秋聲不可聞。の轉合の句、上の意を注せるに、氣格の落ちたるを覺ゆ。吾が邦の歌も、後世のさま劣り行くは、唯此の如しと



いへば、南郭も大いに感服せりとなり。又山部赤人の歌

田子の浦ゆ打出でて見れば、眞白にぞ

富士の高嶺に雪はふりける。

といふを注して、田子の浦より磯傳ひに薩埵の山陰を打出でて見れば、富士の高嶺の雪眞白に天外に秀でたるを、こはいかでと見て感じたるさまなり。何ともいはで有りのままに述べたるに、其の時、その地、其の情、おのづから備ること、古の妙なるものなり。赤人は短歌の神なること此の一首にても知らる。と解きて、細註に、悠然見南山。といふも相似たりといふ人侍れど、かれは、その處にての事、是はふと山陰より立出でて見出したるなれば、其の義異なり。又悠然とし

てとは、みづからの心を注せるに似たれば、猶作れるものなり。此の歌は唯有りのまゝなるが似る者なきなり。など論ずる所、深くその旨を得たりといふべし。

されども何につけても大成を任とせる故に物事に疑を闕かず、強解もまたまゝ見ゆるにや。又唐國のことを仇のごといひて、孔子をさへ議することあり。是は世の儒士自ら夷と稱し、此の國の非を數へて唐土に生れぬを憾むるごときを憤れるなるべし。是固よりその罪いふべからず。皇神の御恵に漏れたる國の靈なり。されどもまた眞淵も甚だしといふべし。譬へば病を薬せん、是になきものは彼處に求めんに何の忌むことかあらん。唯病の平らぐを專



歳七十有餘  
明和六年(三四九)  
歿  
年七十三  
宇萬伎  
加藤五郎左衛門  
美樹  
國學者  
安永六年(三四七)  
歿  
年五十三或八五  
十七トモイフ

とすべきのみ。こは心狭きが故か。  
生涯國學を任として江戸に終る。歳七十有餘とぞ。その  
詠み出でたる歌門人宇萬伎が記しおけるうち、少し書き出  
す。

春の日山を望むといふ題を

見渡せば天のかぐ山うねび山

あらそひたてる春霞かも。

その住居を縣居と名づけゝる處にて、長月十三

夜によめる

秋の夜のほがらくと天の原

照る月影に雁鳴きわたる。

神無月ばかり嵐を

科野なる須賀の荒野に飛ぶ鷺の

翼もたわに吹く嵐かな。

又若きほどの歌とて、別に朱をもて宇萬伎が書

添へし中、

鳴子ひく門田の稻のほどもなく

立ちてはかへるむら雀かな。

宇萬伎いふ、これら姿も詞もよろしきものから、こゝ  
ろかしこきに過ぎていと後の世のさましたり。中  
さだには詞も姿も唯あがれる世のさまにのみ詠み  
うつされし多かりしを、やゝ老に至りてかゝるさま



に(前の歌ど)のみ詠み出でられしはいと高しとも高し。  
世に聞き知る人はありや、なしや。

蒿蹊あやういふ「此の老の後のはおのれも聞き知る人の數に入るべし。又若きほどのは後の世のさまなれば、歌主の後の意にはかなはざらめど、其の才のたけたるを覺ゆ。かゝればこそ一家の學をも唱へ出しけれ。」  
(近世畸人傳)

二〇 述 懷

本居宣長

昨日は今日の昔にて、はかなくのみ過ぎに過ぎゆく世の中をつくとくと思へば、あはれわがよもいくほどぞや。手を

折りて數ふれば、はや三十ちにも餘りにけり。命長くて七十ち八十ち生けらんにて、だに、早く半ばは過ぎぬるよと思へば、まだよごまれるやうなる身も、行先程なきこゝちのし

こゝちのしやまもるんび人さう

朝りあけほふこゝちさうをわ

宣長

本居宣長筆蹟

て心細くぞ覺ゆる。かくのみはかなく心なき木草鳥獸の同じつらに、何すとしもなく、明し暮しつゝ、生ける限のよを盡して、徒に苔の下に朽ち果てなんは、いと口惜しく言甲斐



なかるべきこと、思ふにも、よろづにいたり少く拙き身にしあれば、何事をしいでてかは、世の人にも數まへられ、亡からん後の世に朽ちせぬ名をだに留めましと、いとゞ人に似ぬ愚ささへ取添へてぞ悲し、心憂かりける。さりとして、はた身をえうなきものには、ふらかしはつべきにしもあらず。かくのみ拙く愚なる心ながら、何業にまれ怠なく、わざと心に入れて勉めたらんに、終には一つ故づけて、なのためにしいる節もなかはなからんと、あいな頼みにかゝりてなん。

(鈴屋集)

西園寺公望

今は公爵

嘉永二年(1823)生

二一 明治天皇大葬儀誄詞 西園寺公望

内閣總理大臣正二位勳一等侯爵臣西園寺公望泣血頓首謹ミテ言ス。靈輜殯ヲ啓カセラレ、饋奠方ニ陳ス。群臣咸集リ、友邦畢ク會シ、等シク聖儀ノ幽翳ヲ痛ミ奉ル。恭ミテ惟ミルニ、明治天皇睿智神ノ如ク、峻徳天ニ侔シ。冲齡極ニ登リ、武ヲ神皇ノ肇基ニ踵ギタマヒ、國歩ノ艱難ヲ排シテ維新ノ大業ヲ成シ、五條ノ誓文ヲ立テ、百代ノ國是ヲ定メタマヒ、藩ヲ廢シ縣ヲ置キ、制ヲ革メ治ヲ興シ、内ハ憲法ヲ創定シテ軌範ヲ不朽ニ垂レ、外ハ條約ヲ改訂シテ利權ヲ永遠ニ伸ベタマヒ、法典ヲ修メ、産業ヲ獎メ、兵備爰ニ整ヒ、文教益振フ。常ニ世界ノ平和ニ倦眷シタマヒ、殊ニ東洋ノ治安ヲ軫念アラセラレ、同盟ヲ締ビ、隣交ヲ敦クシ、丕運蔚乎トシテ我ガ武



龍髯・烏號  
黃帝采三首山銅一  
 鑄三鼎於荆山下。  
 鼎既成。有龍  
 垂三胡髯。下迎  
 黃帝。黃帝上騎。  
 小臣不得上。  
 乃悉持三龍髯。髯  
 拔。墜三黃帝之  
 弓。百姓仰望。黃  
 帝既上天。乃  
 抱三其弓與三胡  
 髯三號。故後世因  
 名三其處。曰三鼎  
 湖。其弓曰三烏  
 號。

維揚リ、皇猷淵大ニシテ國威愈宣ブ。盛德洪業寔ニ前古ヲ  
 曠シウシテ後代ヲ光ス。伏シテ顧ミレバ、御宇四十七年ノ  
 間、天行至健ニシテ一日萬機未ダ嘗テ逸豫シタマハズ、庶政  
 咸舉リ、蒼生永ク頼リ、均シク昭代ノ慶福ヲ享ケ、舉リテ萬壽  
 ノ無疆ヲ祝セシニ、一朝不豫アラセラレ、率土震駭シ、天ヲ仰  
 ギ、地ニ躋シ、神トシテ禱ラザルナシ。吁嗟、蒼タル者ハ皇穹  
 胡寧ゾ弔マザル。大駕奄チ登遐シテ永ク兆民ヲ棄テタマ  
 ヒ、靈柩咫尺ニ在シテ御容長ヘニ人天ヲ隔ツ。龍髯ノ攀ツ  
 ルニ路ナキヲ悲シミ、烏號ノ尋ヌルニ地ナキヲ傷ム。情塞  
 ガリ、神逼リ、復言フトコロヲ知ラズ。伏シテ冀クハ在天ノ  
 聖靈ソレ臣等哀々ノ微忱ヲ愍ミ、偏ニ照鑒ヲ垂レサセタマ

へ。臣公望茲ニ百僚臣民ニ代リテ、泣血頓首謹ミテ言ス。

(官報)

嘉納治五郎

教育家  
 前東京高等師範  
 學校長  
 講道館師範  
 生  
 萬延元年(三三〇)  
 生

二三 偉人

嘉納治五郎

古來の生民蓋し幾萬億、其中より卓然として崛起し、功業  
 德澤炳として萬世の下に輝いて居る者は、實に彼等偉人で  
 ある。若し偉人を人類の歴史から除き去つたとすれば、吾  
 人の過去は如何に暗澹として如何に寂寞なものであらう  
 か。幸にして幾多の偉人傑士が星の如く歴史の空に列ん  
 で居て、今猶吾人の心中に不老の其の輝を投じ、破闇の其の  
 光を耀して居るので、吾人人類は此に始めて意義ある過去



大上は徳を立て  
大上有<sup>レ</sup>立<sup>レ</sup>徳、  
其次有<sup>レ</sup>立<sup>レ</sup>功、  
其次有<sup>レ</sup>立<sup>レ</sup>言、  
雖<sup>レ</sup>久<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>廢、此  
之謂<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>朽。

を有し、光榮ある現在を有するのである。随つて吾人の文  
明は彼等を離れて解釋することは出来ない。吾人の經營  
しつゝある事業は、彼等の遺業を繼紹して之に新發展を加  
へんとするに外ならぬのである。古語に「大上は徳を立て、  
其の次は功を立て、其の次は言を立つ」と曰つてあるが、徳に  
もあれ功にもあれ言にもあれ、彼等が人類に及した影響は  
不滅不朽である。凡そ世の中に、壯快といへば偉人の事業  
ほど壯快なものはなく、崇高といへば偉人の人格ほど崇高  
なものはないのである。  
試に思へ。我が國が明治の御代になつてから長足の進歩  
を爲し、世界の奇蹟とまで稱せらるゝに至つたのも、其の直

接の原因は王政の維新にあるのである。さうして王政の  
維新は幾多の偉人傑士の努力奮闘より生じた結果である。  
至誠皇室を尊び、衷心民人を愛し、大勢の趨く所に着眼して

去歲千軍逼我疆  
如劍刃他日浮生夢  
孝女夢一片松菊男孺

戊辰之歲 松菊狂生

(藏爵子松末) 蹟筆 允幸 戸木

筆蹟  
去歲千軍逼我疆  
疆一今朝孤劍入  
他鄉。浮生萬事  
變如夢、一片依  
然男子勝。  
戊辰之歲  
松菊狂生

經國の大本を定め、謀慮深遠、規畫周密、大いに皇猷を贊した  
のは、彼の木戸松菊であつた。高く自ら任じ、篤く自ら信じ、



沈毅端嚴善く謀り善く斷じ、時局の紛難を處理すること快  
刀の亂麻を斷つが如く、凜々たる英風よく上下の信賴を得  
て國家の柱石となつたのは、かの大久保甲東であつた。光

筆蹟  
奉勅單軌向北  
京、黑烟堆、裏蹴  
レ波行、和成忽下  
三通州水、閑二臥  
鐘廳一夢自平一。  
甲東

大久保甲東の筆蹟  
沈毅端嚴善く謀り善く斷じ、時局の紛難を處理すること快  
刀の亂麻を斷つが如く、凜々たる英風よく上下の信賴を得  
て國家の柱石となつたのは、かの大久保甲東であつた。光

(藏昌通能得)蹟筆通利保久大

明磊落、規模宏遠、安危利害の上に超脱して、泰然として動か  
ず、曠懷偉度清濁併せ呑み、赤心を人の腹中に置いて疑はず、  
談笑して天下の勢を制し、國家を盤石の安きに置いたのは

彼の西郷南洲であつた。木戸の譏、大久保の斷、西郷の量、三  
者相俟つて此に天地を旋轉するやうな大業が成就せられ  
たのであつて、世に彼等を尊んで維新の三傑と稱するも亦

西郷南洲の筆蹟  
明磊落、規模宏遠、安危利害の上に超脱して、泰然として動か  
ず、曠懷偉度清濁併せ呑み、赤心を人の腹中に置いて疑はず、  
談笑して天下の勢を制し、國家を盤石の安きに置いたのは

(刻所碑念記盛隆郷西)蹟筆盛隆郷西

筆蹟  
相約投、淵無、後  
先、豈圖波上再  
生緣、回、頭十有  
餘年夢、空隔、幽  
明、哭、墓前。  
月照和尚忌自賦  
南洲

偶然でないのである。當時彼等三傑が協心戮力して經國  
の大業を建てつゝあつた時に、他の一面に於ては、奇傑勝海



筆蹟

戊辰進擊日、三月十五日、蝸牛角上、轉瞬廿五年、皇國一大府、此中無辜民、如何爲焦土、思之獨傷神、八萬幕府士、屬我爲天奸、知否奉天策、今見全都安、參軍勿嗜殺、嗜殺全都空、我有清野術、傲魯挫那翁、官兵過城日、知我唯南洲、一朝設機事、百萬元餽、壬辰初夏、海舟勝安芳

舟の如きがあつて、よく時艱を濟つたのであつた。海舟人となり雋異卓拔、其の炯々たる眼識はよく時局を大觀し、機  
戊辰進擊日、三月十五日、蝸牛角上、轉瞬廿五年、皇國一大府、此中無辜民、如何爲焦土、思之獨傷神、八萬幕府士、屬我爲天奸、知否奉天策、今見全都安、參軍勿嗜殺、嗜殺全都空、我有清野術、傲魯挫那翁、官兵過城日、知我唯南洲、一朝設機事、百萬元餽、壬辰初夏、海舟勝安芳  
 略縱横、死生の境を行くこと平地の如く、終に幕府をして恭順の實を擧げしめ、生民をして塗炭の苦を免れしめたのであつた。

(觀大畫書) 蹟筆芳安勝

維新前後は、我が偉大なる國民精神の最も著しく發揮せられた時で、偉人傑士の風雲に乗じて起つたものは甚だ多かつたのであるが、就中海舟南洲の如きは、高山峻嶽の巍々として雲表に聳ゆるが如く、嶄然として頭角を現したものであつて、若し此等の人がなかつたならば、維新回天の事業もかく速に圓滿なる成功を告ぐることが出来なかつたであらうと疑はれるほどである。我が國民が明治の初年に於て、早くも上下心を一にして盛に經綸を行ふといふ國是に従ひ、世界の競争場裏に進んで大いに國勢を張ることを得たのは、實に此等偉人の賜である。吾人國民が景慕の情を傾けて之が傳を立て、之が像を掲げ、彼等の墓門既に苔むせ



筆蹟

三分出盧兮、諸葛已矣夫、一身入洛兮、賈彪安在哉、心師貫高兮、而無素立名、志仰魯連兮、遂乏釋難才、讀書無功兮、櫟學三十年、滅賊失計兮、猛氣廿一回、人讖狂頑兮、鄉黨衆不許、身許家國兮、死生吾久齊、至誠不動兮、自古未之有、人宜立志兮、聖賢敢追陪、

吉田松陰 名ハ矩方 長州ノ志士 安政六年(三二九) 刑死 年三十

橋本景岳 名ハ綱紀 越前ノ志士 安政六年(三二七) 刑死 年二十六

る今日、彼等が猶吾人の中に活き、吾人を導いて居るやうに思はれるのは、實に其の雄偉なる人格と其の赫々たる功業とを證するものである。

三分出盧兮諸葛已矣夫一身入洛兮賈彪安在哉  
心師貫高兮而無素立名志仰魯連兮遂乏釋難才  
讀書無功兮櫟學三十年滅賊失計兮猛氣廿一回  
人讖狂頑兮鄉黨衆不容身許家國兮死生吾久齊  
至誠不動兮自古未之有人宜立志兮聖賢敢追陪

吉田松陰 筆蹟 (大書)

猶吾人が想を馳せて維新前に國難に殉じた多數の志士を追懷すると、其の奉公の赤誠、敢爲の志氣、轉、吾人をして感慨に堪へざらしむるが中にも、吉田松陰、橋本景岳の如きは、最

藤田東湖

名ハ彪 水戸ノ志士 安政二年(三二五) 震死 年五十

筆蹟

遺却功名萬念 休、渾將心事 附、歷々、自開、故舊沈淪慘、短 笛清、別有、秋。

も強く吾人の注意を惹くのである。西郷南洲は常に「余は先輩に於ては藤田東湖に服し、同輩に於ては橋本景岳を推す。二子の才學器識はとても吾が輩の及ぶ所ではない」といつた。時に南洲は三十歳、景岳は二十三歳の頃であつた

有感

遺却功名萬念 休渾將心事附悠々自聞  
故舊沈淪慘 短笛清 別有秋

橋本景岳 筆蹟 (新維志士芳帖)

事を思ふと、景岳は我が國の青年偉人中でも最も卓越せる者といはねばならぬ。かれ叡智靈覺涌くが如く、早くも國家の大計に着眼し、一青年の身を以て政界の大波瀾の中に手腕を試みたのであつた。不幸にして二十六歳を一期と



身を殺して仁を  
なす

子曰志士仁人、  
無<sub>レ</sub>求生以害<sub>レ</sub>  
仁、有<sub>レ</sub>殺身以  
成<sub>レ</sub>仁。

五人の大臣

伊藤博文

山縣有朋

山田顯義

品川彌次郎

野村靖

して刑場の露と消えたけれども、彼の志は南洲等の知己に依つて成就せられた。吉田松陰も三十歳の短生涯を以て非命の死を遂げたけれども、彼の人格は永久に國士の典型として青史を照して居る。忠愛の至誠、英發の志氣、大義の存する所は水火をも避けず、身を殺して仁をなすといふ志士の本領は、彼に於て最もよく見ることが出来る。彼が一小私塾の教育に盡した熱誠は、幾多の志士を輩出して王政維新の急先鋒とならしめ、明治の御代になつてからも五人の大臣を出した位であつた。吾人は松陰景岳に依つて、英偉なる人物が其の少壯期に於て既にかくも貴き事業を爲し得たことを詳にし、感歎の情に堪へないのである。

かく吾人は明治昭代の起因を尋ねて、幾多の偉人に景仰の情を傾け、感謝の意を表すると共に、此等の偉人の後を受けて我が國の將來を經營すべき少壯國民の任務の重大なるに想ひ到らざるを得ないのである。少壯國民にして自家の任務の重大なるを知る者は、又よく此等の偉人を學んで其の先蹤を繼ぐことを務めねばならぬ。頼山陽は十四歳の少時に、

十有三春秋、逝者已如水。天地無始終、

人生有生、死。安得類古人、千載照青史。

と歌つた。古來の偉人が少年、青年の時よりして漸く發達した逕路を尋ねると、多くは前代の偉人を景仰して感憤興



起したのに基づいて居るのである。偉人を景仰するのは青年自然の情であつて、此の情の生ぜぬものは、其の志多くは低劣で、其の行亦多くは鄙陋である。吾人は前偉人に活理想を求めて、此に志氣を振ふことが出来るのである。志氣が振つて、此に向上發展の途に就くのである。

固より、古來偉人の人格には、おのづからにして卓越したのもある。偉人の事業には、時代の大勢が與つて、其の背後の力となつて居るものもある。それで偉人を學ぶものが、誰も皆偉人となり得るといふことは難い。併し偉人を學ぶことに依つて、天才ある者は益之を英偉に發揮することが出来、凡庸なものは、其の人として、最高度の發展を爲し得

聖人は百世の師なり

孟子曰聖人百世之師也。伯夷柳下惠是也。故聞伯夷之風者、頑夫廉懦夫有立。志。聞柳下惠之風者、薄夫敦。鄙夫寬。奮乎百世之上。百世之下聞者莫不興起也。非聖人而能若是乎。而況於親象之者乎。

るのである。孟子は、聖人は百世の師なり。伯夷、柳下惠はなり。故に伯夷の風を聞く者は頑夫も廉に、懦夫も志を立つるあり。柳下惠の風を聞く者は、薄夫も敦く、鄙夫も寛なり。百世の上に奮ふ。百世の下、聞く者興起せざるなし。と云つた。偉人を學ぶべき者は、獨り偉人には限らない、懦夫も鄙夫も、皆偉人に依つて鼓舞せられ、激勵せられ、感化せられ、指導せられ、以て高上の生活に進むのである。

且古來凡庸を以て嘲られ、微賤を以て輕んぜられたものが、他日巍々として衆目を驚かすやうな發展を爲し得た事が、少からず史上に存するのを思ふと、今日不幸な境遇に生活し、凡庸愚劣と評せられて居るものも、決して失望自棄する



を要しないのである。前に列挙した維新前後の六偉人の  
 ごときも、何れも皆微祿の士であつた。南洲、特に海舟の如  
 きは眞に赤貧洗ふが如きものであつた。松陰、景岳の如き  
 は生來虚弱多病であつた。南洲の如きは少時極めて魯鈍  
 といはれたものである。松菊、甲東の如きも、少時は意氣が  
 壯なのみで、特に英才の煥發した譯ではなかつた。若し彼  
 等が精勵刻苦して勳功を建つるに及ばず、不幸夭折したな  
 らば、青年偉人として後世に傳へらるべきことは何もなか  
 つたであらう。此等のことを思ふと、「我も人なり、彼も人な  
 り」といふ思想は、決して僭越狂妄として排斥すべきではな  
 い。「王侯將相寧ぞ種あらんや」といひ、「英俊とは凡常の士の

王侯將相

壯士不<sub>レ</sub>死即已。  
死即舉<sub>二</sub>大名<sub>一</sub>  
耳。王侯將相寧  
有<sub>レ</sub>種乎。

發憤勉勵したるものゝみ」と云つたのも無理ではない。顔  
 淵は「舜何人ぞ、予何人ぞ」と云つた。有爲の士の志を立つる  
 ことは常に此の如きものである。今や我が國は世界の日  
 本として大活動大發展を爲すべき時に臨んでゐる。公私  
 各般の事業に於て英偉なる人物を要することは甚だ急な  
 のである。今日の多數青年の中、誰かよく前英に續ぎ、來者  
 に先だつて大業をなすであらうか。偉人を師として奮起  
 するは終生の最大快事であつて、假令運命は其の人をして  
 偉人の名を成さしむるに至らずとも、我として最高の發展  
 を爲し得たならば、人生の目的は此に達せられたと謂ふべ  
 きではあるまいか。(青年修養訓)



源隆國

源高明ノ孫  
世ニ宇治大納言  
トイフ  
平安時代ノ文學  
者  
承暦元年(七七)  
薨  
年七十四

二三 源博雅

源隆國

今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり、延喜の御子の兵部卿  
克明親王と申す人の子なり。萬の事やんごとなかりける  
中にも管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に  
ひきけり、笛をもえならず吹きけり。此の人村上の御時に  
四位の殿上人にてありけり。其の時に逢坂の關に一人の  
盲庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これ  
は敦實と申しける式部卿の御宮の雜色にてなんありける。  
その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける  
人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶

敦實

宇多源氏ノ祖  
康保四年(六七)  
薨  
年七十

をなん微妙にひく。

しかるあひだ、此の博雅此の道をあながちに好みて求めけ  
るに、彼の逢坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、彼の琵  
琶を極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやう  
なればゆかずして、人を以て内々に蟬丸に言はせけるやう、  
「など思ひがけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし。」と、  
盲これをきゝて、その答をばせずして曰く、

世此中はぞてもかくても過してん、

宮も藁屋もそてしなけば。

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅之を聞きて、いみじ  
く心にくく覺えて、心に思ふやう、「われあながちに此の道を



好むによりて、必ず此の盲にあはんと思ふ心深し。それに盲命あらんこともはかり難し。又われも命を知らず。琵琶に流泉・啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべきことなり。唯この盲のみこそ之を知りたるなれ。かまへてこれが弾くを聞かん。と思ひて、夜彼の逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸その曲を弾くことなかりければ、その後三年の間、夜々逢坂の盲が庵の邊に行きて、其の曲を今や弾く今や弾くと密に立聞きけれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはぐもりて風少し打吹きたりけるに、博雅、あはれ、今宵は興あり、逢坂の盲今夜こそ流泉・啄木は弾くらめ。と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲

琵琶をかき鳴らして、物哀れに思へるけしきなり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞くほどに、盲獨り心をやりて詠じて曰く、

逢坂乃關の河らしのをげしきに、

志ひてぞ居たる世をすごととて。

とて琵琶を鳴らしたるに、博雅之を聞きて、涙を流してあはれと思ふこと限なし。盲獨言に曰く、あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬ數寄者や世にあらん。今夜心えたらん人の來よかし。物語せん。といふを、博雅聞きて、聲を出して、王城にある博雅といふものこそこれに來たれ。といひければ、盲の曰く、かく申すは誰にかおはすと。博雅の曰く、我は



しかくの人なり。あながちに此の道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に逢ふ」と。盲之を聞きて喜ぶ。其の時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅流泉啄木の手を聽かんといふ。盲故宮はかくなん彈き給ひし。とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこれを習ひて、返すく喜びて曉に歸りにけり。これを思ふにもろくの道は只かくの如く好むべきなり。それに近代は實に然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。げにこれあはれなる事なりかし。蟬丸いやしき者なりといへども、年ごろ宮の彈き給へる琵琶を聽きて、

極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりにつれば、逢坂には居たるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなん語り傳へたるとや。(今昔物語)

二四世の中

絲瓜

木端

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとは暮れもせむ

郭公

頭光

郭公自由をにきく果は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

木端  
大阪ノ人  
安永二年(四三)  
歿

頭光  
岸宇右衛門  
江戸ノ人  
寛政八年(四六)  
歿  
年七十



朱樂菅江

山崎景貫

徳川幕府ノ士

寛政十年(一四九)

歿

年六十一

2585  
2958  
117

四方赤良

太田南畝

又ノ號ノ蜀山人

徳川幕府ノ士

文政六年(一四三)

歿

年七十五

後徳大寺

後徳大寺左大臣

實定卿ノ歌ニ

「郭公鳴きつる方

をながむればた

だ有明の月ぞ残

れる」

葛飾の龍眼寺に萩を見侍りて

朱樂菅江

よきと見ゆは萩寺の飾一紙

ともうもけきいけい

早春 四方赤良

生疎の禮者浅見れば大道を

横まらざる

郭公に有明の月ぞ残る繪に

郭公鳴きつる方に

後徳大寺のありあきの顔

早蕨

早蕨が握りまじりて

山の積りけり風がふく

歌人 宿屋飯盛

歌よみは下をよみよれ天地の

動き出さるる

二五 月雪花

芳賀矢一

赫々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照す。月の光は溫和で、日光の様に峻烈ではない。日は仰いで見ることも出来ないが、月は眺めて親しみ易い。

二五 月雪花

一四九

宿屋飯盛

石川雅望

國學者

文政十三年(一四九)

歿

年七十八

天地の

力をも入れずし

て天地を動かし

目に見えぬ鬼神

をもあはれとお

もはしむるは歌

なり

芳賀矢一

國文學者

文學博士

東京帝國大學教

授

慶應三年(一五三)

生



太陽が一たび出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象悉く照破されるのであるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤・貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清冷の光である、高潔無垢・崇美と稱ふべき、やさしい光である。休息・安靜の夜には最もふさはしい。この光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じずる、詩的情緒が油然而として湧く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帯の椰子の陰、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照す月光の人の胸懷にしみ渡ることは、恰もその影の千草の露の玉毎に宿るやうなもので

うちむかふ  
荷田蒼生子ノ歌

ある。「うちむかふ月」は一つのかげながら、うかぶはちゞの思なりけりである。

東西古今、悲喜・哀歡の情熱は、幾萬回となく幾億回となくこの光に向つて訴へられた。之を嗟嘆し、之を吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の言語に充ち満ちて居る。天文學者は云ふ、「月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である」と。この冷たい光が古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓・茅屋も皆同じ色に埋められる。げにや、花ならば咲か

花ならば  
咲かぬ

花ならば咲かぬ  
梢もまじらまし  
なべて雪ふるみ  
吉野の山



三千世界  
宋ノ僧劉師道ノ  
句

ぬ梢もまじらまし。なべて雪降るみ吉野の。といふやうに、  
眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふ。「三千世界銀  
成色、十二樓臺玉作層」の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去  
つて、人をして廣寒宮裏アストロノミヤに在るの感を抱かしめる。天から  
落ちて來るこの純白の色に比べては、地上の色も甚だしく  
汚く感ぜられるのである。霏々と散り紛々と飛んで、唯一  
條の川を残して、山といはず野といはず、瞬く中に瓊玉を敷  
く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪  
炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも  
變らぬ。花紅葉色々の眺は、素より美しいに相違ない、花の  
散つた後の新緑の色も目の覺めるほど鮮かであるが、考へ

れば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に  
掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したも  
のではあるまいか。一年中、蓮の花の開いて居る極樂淨土  
は、決して我等の世界程楽しいものではないであらう。  
雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫ハクカランマンの美を見ればこ  
そ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色で  
ある。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれ  
て咲きかはり咲きみだれるのは、人生としては餘りに贅澤  
な感じもする。花は美しい色の外に、芳しい香さへもつて  
居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根のやうな花でも、  
無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價の生



花をし見れば  
年ふれば齡は老  
いぬしかはあれ  
ど花をし見れば  
物思もなし

じたのは無理は無いが、山の花、野の花、何れも月や雪と同じ様に、一文錢を要せぬのである。人世に花がなかつたなら、いかばかり寂寞を感じるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を忘れぬのである。月雪のながめはその高潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艷麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ花やか花々しい華美華麗華奢等の語は、皆花に基づいた語である。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余は唯、花をし見れば物思もなしといふ歌を以

山櫻  
康養王ノ母ノ歌

冬ながら  
清原深養父ノ歌

笠は重し  
詩曲「葛城」ノ句

て、總べてを包括し得べしと信ずる。月雪花三つのながめは各、その特長がある。いづれを前、いづれを後といふことは出来ぬ。

山櫻、花の下風吹きよなり、

木のもとごとと花雪のむらぎえ。

これは花を雪に喩へたのである。

冬ながら空より花はちりくるは、

雲の何なたは春よやあるらん。

これは雪を花に喩へたのである。

笠は重し、吳山の雪靴はかんばし、楚地の花、肩上の笠には無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。



これは雪を月と花とにたとへたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪をめでぬ人も無い。思へば世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は即ち人の家である。この地の人は、寸紅の目を楽しませるものも無い。又之に反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見たことが無い。瓦斯電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜深を知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を撞にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

世々を経て  
伊藤仁齋ノ歌

月雪花のながめは、古人の歴史が加つて一層の感興が増す。  
世々を経てながめし人の數はまた

多きをもゆるせ、秋の夜の月。

月は古來の歴史を照す鏡である。

年々歳々  
唐ノ劉延芝ノ句

年々歳々花相似、歳々年々人不同。

鬢の霜、頭の雪。人生の感は花を見てますます繁く、雪を見ていよゝ多くなる。二千五百年來、月雪花三つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。

(月雪花)







●書用科教科語國行發館風光●

保元平治物語鈔本	增鏡鈔本	平治物語鈔本	太平記鈔本	現代文新鈔	國語教科書	國文讀本	國文教科書	國文教科書
全再	全再	全再	全再	全修	全修	全訂	全修	全修
壹	壹	壹	壹	五	八	十	拾	拾
冊版	冊版	冊版	冊版	冊版	冊版	冊版	冊版	冊版

徒然草讀本	古今文選	益軒文鈔	花月草紙鈔	十六夜日記講本	方丈記讀本	義經記鈔	時文小編	常山紀談鈔本	徒然草鈔本	神皇正統記鈔本
全再	全再	全再	全再	全一	全一	全再	全再	全再	全四	全再
壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹
冊版	冊版	冊版	冊版	冊版	冊版	冊版	冊版	冊版	冊版	冊版

m.s.  
Tinkard





広島大学図書

2000302015

